

昭和廿七年七月一日第三種郵便物認可 (毎月) 隔一日期付

創刊大正十三年・通卷三百七号

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.307

麻生路郎☆主宰

川柳の雅証



十二月號

# 本社の師走川柳大會は

十二月十三日(第二土曜)午後五時半 下寺町の光明寺に於て  
 兼題「強盜」「賣出し」「溜息」・各支部対抗句戦の復活・柳話其他

## 十二月号目次

昭和廿七年

題字	麻生 路郎	社告 告知版	(一五)
表紙	米田三男之介	★ 不朽洞句帖	麻生 路郎 (一三)
句評	山雨楼・喜由 満年・半休門 卜占	近作 柳 檉	麻生路郎選 (一四)
川柳は斯くの如く人を創る	麻生 路郎 (一三)	川 柳 塔	麻生路郎選 (一四)
川柳大學(6)	福田山雨楼 (一六)	同舟 近 詠	諸 家 (一九)
最悪の日	日置 文笑 (一六)	一路集 「急病」	北川春葉選 (二一)
薩摩守忠度	富士野鞍馬 (一三)	「嵐」	国弘半休門選 (二二)
今月の歴史	福田山雨楼 (一九)	各地 柳 檀	(二四)
奇 名 伝	長野 文庫 (一七)	不朽洞会から	(一七)
物故川柳人慰靈句会	戸田古方記 (一三)	柳 界 展 望	(二三)
川雑支部の改組と新設	(一三)	不朽洞会役員の新陣容	(二三)
BK 放送川柳	麻生路郎選 (一〇)	編輯局にて	(一七)

御贈答に

### 大丸の商品券



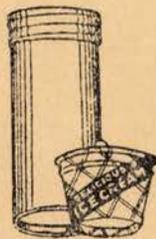
大丸 大阪心齋橋

五〇〇円・一〇、〇〇〇円

京、阪、神三府の他  
 高知、鳥取、下関、  
 別子の各大丸に共通  
 一階 心齋橋筋側

酒服用紙コップ

食堂用紙製品一切

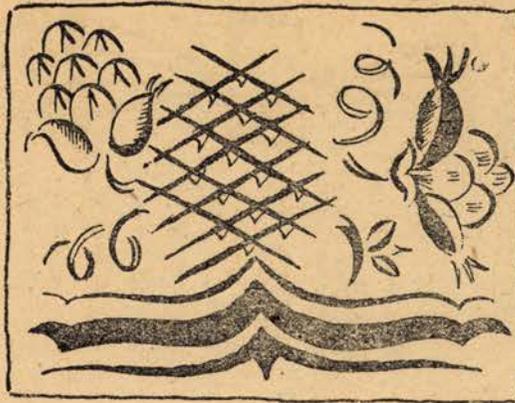


アイスクリームは

堅牢で衛生的なこの容器で

特殊紙器工業株式会社  
 フタバカツブ株式会社  
 大阪市阿倍野区晴明通一丁目

電話 天下茶屋 2282 2283



## 川柳は斯くの如く人を創る

曾て十二月を控えて失業した時に「十二月うれしい風も少し吹け」と詠んで自ら慰め

ていたことがあるが、十二月と云う月は失業しなくても、あまりうれしい月ではない。世の中には十二月になつて越年の希望の稀薄な気の毒な人たちが、か

なり沢山いるが、私たちがのように金はなくとも川柳に浸つて日目を朗らかに過ごしていられば、徒らに生活苦をなげき悲しんでいる人たちより、どんなに幸福か知れないと思ふ。

禍福はあざなえる繩の如きものであると聖人ぶる必要はないが、川柳の一句に心から溶け込んでいられれば、世の人が苦惱と感ずるような出来事にぶつつかつても、それほど苦しみを感じないでいられるものである。常に濁つた空気のの中に住んでいる人たちは新鮮な空気を呼吸しただけでも幸福感を充たすことが出来るものであるが、私たちにとつて川柳は常に新鮮な空気を呼吸しているのと同じ幸福感を与えて呉れるのである。

られるのも、子規に俳句があつたように、啄木に短歌があつたように、山雨楼氏に川柳があるからである。これは山雨楼氏一人の問題ではない。千石荘で多年闘病生活を續けている千舟君にしてもそうであり、梵鐘君にしてもその他の人たちにとつてもそうである。この人たちにくらべて、健康で川柳に親しめることのどんなに大きなよろこびであるかを考えたなら、あんまりゼイタクは云えないのであるが、それをそう思わないし、又思えないのが世の常の人間なのかも知れない。

葉光君は年少の頃、奇禍に遇い爾來数十年常の人間生活の出来な不幸な人であるが川柳に光明を見つけて明るい日を過していることを思ふと、川柳なるかな、川柳なるかなと絶叫したくなるのである。葉光君のことを思ふと、前月七十九歳の

高輪で亡くなられた母堂のことが偲ばれる。安倍王子神社で句会が催されるも母堂はあの高輪もいとわず自らリヤカーを押して葉光君を社務所まで運んで来られ、会が果る頃になると又迎えに来られたものである。葉光君に母を詠んだ句の多いのもそれがためである。佐市が亡くなるまでは死ねないと云つてガン張つていられたが、それを思ふと今少し長生きして欲しい人であつた。句会場がアベノ橋に移つてからは柳友の春柳君が背負うて来て友情の美しきを見せると呉れる。あゝ川柳なるかなである。

最近私は岡山県の英田郡大原町に出かけた。その時に会つた十坊と名乗る川柳人は病名不明の病のため、歩行が困難でトボ／＼と歩くのでつた雅号だとのことであつたが、翌日大吉村で催した句会に柳友の介添えで出席しての話に、川柳を知らぬ人は、日目の不自由な生活を思ふと、首でも吊つて死んでしまいたいと思つたとのことである。しかし今、十坊君は川柳によつて救われた生活をさせている。同じ句会にのぞんだ地久平君はペン屋の主人であるが、川柳を知るまでは非常に怒りつぽくて、妻子が困まつていたそうであるが、川柳を作るようになつてからは少しも怒らなくなつたそうである。パンを焼きながら

## 不朽洞句帖

麻生路郎

Y君の郷里大吉村にて

山迫まれども 君を生んだ村

柿一つ一つが秋の景となり

静かに眠むらん山も眠れり

見直してくれる木の香の家を建て

故郷ではただ物質で評價され

(路郎生)



投票場風景  
 大牟田市 高田 抱逸  
 神前結婚佛前結婚負けて居す  
 規定により晝もキツチリ休みやはり  
 赤い羽根押しの一手に恐れ入り  
 大阪市 須崎 豆秋

大阪市 中島生々庵  
 女秘書やけに社長の肩を持ち  
 洋服で手をつく仲居憐れなり  
 内職があつて何と煙立ち  
 ホノル、市市 岡 曉舟

今日からは慈照大姉として仕え  
 深々と母七十年の皺  
 兵庫県 戸 倉 普天

老秘書の退屈まぎれの千字文  
 インキ消しも置いて秘書課の能筆家  
 一票になるかならぬのみ、ずの字  
 稲刈りへもう感謝なぞして呉れず  
 尼崎市 水谷 鮎美

どの子にも頼らず老父の独り住む  
 鮎釣りのかへり温泉の町通りぬけ  
 祝開店  
 たいこばし恐妻組も来てはやり  
 連絡の夜汽車は生ける如く見へ  
 横浜市 福田山 雨樓

鳩山は病横綱であつけなし  
 轉々と寝ダコわが身をいとおしむ  
 四疊半式文学に文化草  
 長き夜をろくしびん欲しくなり  
 初雪と聞いて心のただ重く  
 ホノル、市 内藤草 一郎

いゝ用で有つて呉れよ靴をはく  
 妻の愛もえるでもなく枯れもせず  
 私では氣に入るまいが酌ぎたがり  
 派手な柄着ますも若い夫ゆえ

流汗を追い切れずして二号病み  
 会計が来るとマダムはお茶を立て  
 浮貸の金とは知らずマダム借り  
 店舗改装寝ることもなく廣ろげ  
 庭石をはめてる祖父は自由党  
 日曜は妻の日課へさからう日  
 ホノル、市 白砂 旋風

豆の芽が静かに土を割つて居る  
 金よりも心の友が強かりき  
 靴磨き僕は独立して居ます  
 学閥を離れて趣味の手と手と手  
 出漕つて残暑に不義理またひとつ  
 住宅が出来て様方も別れ  
 老らくの恋綿菓子の甘さに似  
 禿げてゝも女を妬かす金があり  
 徒への通勤(二句)

遠いけど電車は樂な逆コース  
 釣堀の今度来たると電車で見  
 休んだは佛事行つたは甲子園  
 お役所の口語書類がきざに見え  
 ストリップ舞台は既に秋の景

ふだん着で来てレコードをかけている  
 入院をすゝめる医者のお話好き  
 松茸が届いて何も云うて来ず  
 交際をしてる丈けようそぶけり  
 相宿の氣長は風呂もまだ済まず  
 足袋はだし男は負けた顔になり  
 支那服で秋の廊下を歩いてみ  
 早立の靴こぼろぎが一つとび  
 大阪市 丸 尾 潮花

食うためのハンドル又も人を轢き  
 恐しや看護婦さんは外科が好き  
 なんぼでも泣けど冷めたいひとになり  
 大胆に逢えぬ自分を知る夜風  
 愛されてからの世間をせまく住み  
 天然現象ですかと禿をさわりに来  
 此の辺で捨てる相手へする無心  
 大阪市 北川 春巢

新築へ雅号の標札までもかけ  
 女教員三人しやべり、去に  
 子を持たぬ膝は荷物ものせぬなり  
 道樂に始めた株で首を吊り  
 尋卒を賣り物にして立候補



奈良県 尾崎方正

着こなした服と別れる七ヶ月  
四十歳の処女穢ならし〜  
眞黒い素足白靴く〜りつけ  
持ち株の相場も知らず貯めてゐる

岡山県 浜田久米雄

借金はこうも男の氣をもませ  
借金のはなしすぎない返事する  
この年で腰の軽さを親しまれ

大阪府 清水白柳子

仕事終えて糊の利いたる身の廻り  
やけた石並べて妻の花畑

姫路市 夷 一笑

飯時を心得ていて猫かへる  
パチンコはさらいパットを喫う暮らし  
寒暖計のぞかなくなり秋となる  
秋はよし行きたいとこが多すぎる

大阪府 武部香林

妻君も愛想をつかすもの忘れ  
大学生の母とは見えぬ若さにて  
虫を聴く人とも知らず虫だまり  
秋を呼ぶ稲妻なれば光れかし

岡山市 大森風來子

背をかかめトタンをくぐり人が住み  
夜逃げとは質屋うす〜知つて買い

雨の大湧谷

貸切のバスから硫黄だけを嗅ぎ

伊豆大島にて

シャツターへアニコポーズを聞いてくれ

伊東温泉にて

灯ともしへ丁度伊豆から船が着き

鳥取市 中島鉄洲

君も識る釘に長短ある如く  
昔の妓に逢えば買物籠を提げ  
五万圓溜める話の本が賣れ  
轉び寝の素足に触れしものは秋

大阪府 水谷竹莊

金故の抱擁ふつと味氣なし  
麻雀へ一家揃つたむつまじさ  
茄子の艶妻の手並をほめてたべ  
初恋は手も握らずに月をほめ

下関市 國弘半休門

生活へつゞく投票終へて無事  
賣春婦男小さく通り抜け  
聞いて呉れるのが鼻糞をほじる

尾崎市 小林文月

足の出る出張なれど断われず  
池田厚子夫人  
山羊の声眼覚時計の代りする

大阪府 富岡淡水

生さる逞しさヂャン〜街の夜  
秋の花咲いて見たとて独りぼち  
罷たて〜見たが課長と見て呉れず  
人生の疲れを娘に指摘され  
金さえあれば腹立ちほせぬ  
湯上りに青きみかんの舌ざわり

奈良県 飯降白香

花をさ〜ぐ順までさまるさわぎ方

美しい恋がほしいよ秋の雲

女四十けちめ忘れた許しよう

親しきも礼儀あれどてキスもせず

山口県 長野井蛙

大安の日を選んだが落選し

ふどころ手二号にパチンコ屋を出させ  
振り上げた拳揉手にさすも金

大阪府 上田春柳

朝風呂で還曆と言ふ髭を剃り  
ぼろくそに言うだけ言うておやぢ寝る  
あれこれと迷う程にも金はなし

布施市 森下愛論

ヌードにも慣れて画廊は秋となり  
パトロンが決つて女肥満する  
平凡に船場に育ち老舗つぐ

岡山県 丸山弓削平

水に落ち亀存在を認められ  
逃げ出す氣亀は見ているとは知らず  
亀の恋ゴト〜ガタと抱擁し  
泉水の亀孤立派の様に居り  
心まで岩になり切り亀の寝る

岡山県 直原七面山

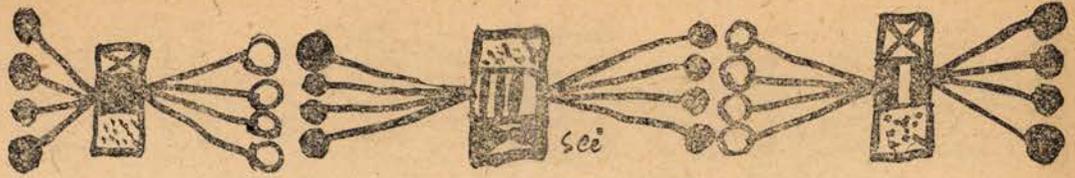
思い入れの風を女の扇子から  
女事務一人も居らず殺氣立ち  
旅の汽車蛇の食い方など話し  
夫婦喧嘩を楽しむ程に年を取り  
エムボタンの外れ氣にせぬ程に老け  
担ぎ屋に見張られているポリスさん

映画旅愁を観て

ブランにはなかつたキッスしてしまい

宇部市 上林粗影

新しい光つかめず髪を梳く  
萩桔梗更に女道を守りぬく  
火葬場妻の金齒など想うまい  
欺されてゐる風で未亡人よく泳ぎ  
嘘を言う女の眉は細かりき



大阪市 西森花村

野良犬の追へば淋しい目でありし  
日曜のもう二三時間欲しいなり

兵庫県 家沢齊花

子守してバスの時刻をよく覚え  
再軍備火鉢を出せと言うてなや  
舞台から見ればとぼけた顔ばかり

岡山市 藤本満年

哀れわれ三等重役さまの下  
仁侠の男と見せる保身術  
事務机つるべ落しの陽を知らず  
丸ぼちやの瘦せるバレエを習わされ  
中年のアベツクしみく景を賞め

熊本県 西口如川

戦争か平和か株の揺れ具合  
木枯しに心の奥も揺すぶられ  
本妻の位置を守るも処世術

岡山県 福島鉄兒

酒少し飲んで見たらと女房に  
蠅連れて来て魚屋が叱られる

大阪市 塩浜一路

去る者は追はず先輩淡々  
総選挙すめば何時もと同じ秋  
熱演へ補助席向きを変えてゐる  
ぬれねすみになつて募金は僅かなり

大阪市 福本嗣骨

弟に夢あり秋のベレー帽  
四五人で来た補助席のウキスキー

弟某劇団に入団

兵庫県 榎南夏六

女遂に不敵な自信に屈したり

岡山市 服部十九平

保険屋が頓死の例を先づ語り  
郷土史に載る家柄が扶助を受け

岡山県 大森娛句樂

迷惑になろうと知らぬ口を切り  
人妻になつても逢えば煙草呉れ  
人妻にまだ成り切れぬ口をきき  
酒癖の事履歴書に書いてなし  
食荒した塵大阪を証明し  
観楓の時雨恐れぬ程に酔い

尼崎市 長谷川三司

長男に生れ損じた様に住み  
先輩の不幸夜そばを喰ひながら  
アコーデオンとめて政見義手も聴き  
縫うた数自慢しあつてる外科患者

兵庫県 若林草右

クイズクイズ又千円の鐘がなり  
冷房の文化は遊ぶ所だけ  
水掛論大臣さへもして居ます

大阪市 足立春雄

熊本県 有働芳仙

一本のルージュ魔女にし天使にし  
性典の何度も読んで置く所

香川県 大西迷窓

まだ出来ぬ子の将来を語り合  
お目出度が急にひもとく産科学

大阪市 浜畑胡蝶

カッとなる辭が職場をファイにする  
スコアブックをつけるに書をぬきにして

下関市 阪田良坊

寺の柿今年も子等のものとなり

処女作がなつかしいゆうなる年になり  
新妻は弁当箸をまた忘れ

下関市 石川侃流

パチンコへおんぶした子が泣きはじめ

阿蘇 茫みな光つて阿蘇は明けはじめ  
大阪府 安岡珊枝郎

其是非は誰れも知らない再軍備  
短所さえ今は懐かし戦死の子  
夢見てるような顔して月みてる  
落選は分つてましたと云えませす

岡山市 大倉四策

警官の恋人御難

雲ながる、果てにを讀みて  
戦争いやおれも銃もつた事があり  
再軍備又も白衣を出すつもり  
ハーモニカ吹く病床へ夕日落つ

広島県 山田季賛

玉野市 中村ただみ

染めたとて五十は五十だけの髪  
めづらしいうちは落葉も拾われる  
旧友も鳴かず飛ばずに孫抱くか

大阪市 山本葉光

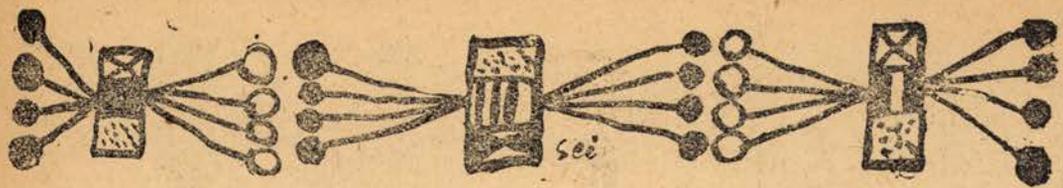
村添いの若さ病室派手になり  
秋深し病む母看護る帯を締め

大阪市 東喜久堂

笑うのも無精になつて世に拗ねる  
あたり名画見別けもつかぬ程煤け

倉敷市 木村千容

油蟲三度叩いてどりにがし



招かざる客が正座にすわり込み  
対座しただけで脅迫感じとり

岡山県 田垣方大

割数の少ない方へ浮動票  
抜かれそうなる吾が子へ思はず立あがり

石川県 那谷光郎

蚊帳の中までも童話が續くなり  
聴診器を診るなど思へども

問うだけを答える医者頼りなく  
妻若くまだ制服が似合いそう

窓際へ先生欠伸を持つて行き

大阪府 木村水堂

勉強の出来ない順によく走り  
骨のあるところをみせて戯になり

女史という妻をもつて不仕合せ

局の慰安会

どうみても女は損な慰安会

熊本市 花岡英子

無愛想な顔だが座席すぐゆづり  
スカートの軽さ少女の長い脚

草笛へはるかなる人しのびつゝ

堺市 八木摩天郎

十二月エレベーターに追ひすがり  
解散の顔に葉巻も吸うとれず

憲法で行けば夫婦になれる筈

高槻市 福田丁路

犬も愛想をつかさ程落ちぶれる  
悄然と腕をこまねく請求書

岡山県 水谷谷水

敗走の演習にしてはチト拙ひ

赤い羽根商賣染みて今日も暮れ  
政治にはうといが二号待つて居り

岡山県 岡田夜潮

いくら遅う帰つて見ても起きており  
倦怠期妻の無趣味に腹が立ち

お祓いが長うて太鼓の鉄数え

岡山県 坂井三葉

遺言へ家中の手が握られる  
人妻になれば話もして呉れず

岡山県 政田大介

歎待に明日のブランがチト狂い  
生理日といつわりからむ手をのがれ

校長も集團下痢の中におり  
役得は松茸狩も見逃さず

岡山県 白井三林坊

先生の娘へ恐る恐る恋

香川県 安部寛子

ない袖はふれぬと内職の手をとめず  
もう少し考へさしてと又のがれ

大阪府 青柳扇子仙

千二百年大佛らしいお年です  
空席はまだ來賓が見える筈

料理だけとりえの妻のにぎりすし  
さかり場も近いところに蛇料理

岡山県 岡村牛耕

警察の手帳俳句も書いてあり  
迷信かそんなら神棚下すかい

嫌いと云はず頭痛にして逃げる  
喋べらないときはガムを嚙んでおり

大阪市 稲葉鳩花

君を待つホームへネオンの灯が流れ

落着かぬ姿を姉に見すかされ

茨木市 下山清潮

貸したのは喋べり借りたは言はず死に  
共産党ほどにきらいな蚊に食はれ

退社してから娘の池の坊忙しい  
岡山県 本田恵二郎

二人妻縁と云うには悲し過ぎ  
大阪府 眞鍋一瓢

やりくりのデザインを妻はめられる  
横綱が負けアナウンズ名調子

無軌道な恋に理解をせよと云う  
安んじて死ねと保険に入れられた

たまさかに妻いたわつて怪しまれ  
懷疑派のかまさり恋も知らず死に

パンの國から大使鹿島立ち  
値踏みされ娼婦さかなの様にはね

花道で棧敷をわかつ市女笠  
鮭に乗る鮭は無駄でない赤さ

油虫只逃げる丈け逃げる丈け

大阪府 飛藝春風

輪轉機有爲天変を知る世相



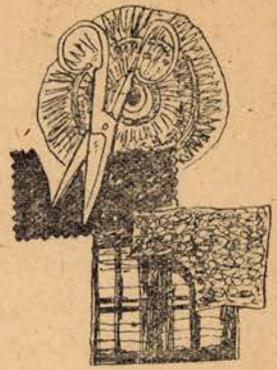
たっぷり

愛蔵たっぷり  
B1 たっぷり



疲勞と脚氣に





# 川柳大學 (VI)

川柳の内容

福田山雨楼

▽川柳の本質については前講で承りましたが更に敷えんして川柳の内容の問題を論及していただきたいと思ひます。

○本質と云えば本来の姿と云へる、即ち全体の性質、特徴を明らかにすることであるが、内容は所謂中身であつてその中に何が盛られているかを探らなくてはならぬ。本質を採求するには形態、精神、沿革、属性、目的、表現、調律及び作家等の諸問題に触れねばならぬが、内容を明徴するにはその種々相を具體的、類型学的に分析する必要がある。如何に外観が立派でも内部構造と調度の整わない住宅は居住に適しないように、句も内容がなければ空疎である。荒玉は磨かなくては

光を發しないが瓦れきでは如何とも爲し難い。先ず内容である。湧き出る清水のように内から盛り上る詩情を捉えなくてはならない。句箋を手にして苦吟する有様は陣痛のそれではなくて、無から有を生み出さんとするあがきのようであるが、実はそうではない。過去の経験や実感、追憶、夢、熱情、理想などを思ひ浮べ甦らせる努力をしているのである。頭の中に、或は心情の中に蓄積されておるかしみの詩情を發掘して出るのである。藏の中から取り出すようなものである。

どんな内容のものを捉えるべきか、その目標から定めてかかる必要がある。油の乗りきつた川柳人はやゝもするごどんな内容でも川柳に詠い得る、この錯覚を起し易いものであるがそれは間違つてゐる。推敲に練磨を要するよう内容にも選択を要するのである。蜜蜂が花の蜜を漁り蟻が甘味を運ぶように、川柳人は川柳素材を常にキヤツチし常に備蓄する用意がなくてはならぬ。

東、制限される面のあることは止むを得ない。これを救う一つの方法として連作があるがこゝでは触れない。それから短小な形式であるが爲に内容が生かされる面もあることを忘れてはならない。ピストンの中に圧縮された蒸氣であればこそ機関車を走らす力を持つのである。定型はわずか十七音しかない言葉に内圧力を與えるのである。岡崎義恵教授の名著「藝術としての俳諧」の中で、発句の形態を極微の藝術と云う立場から論述されこれを第一に取上げていられるが、われわれ川柳人はこの極微の藝術に携わるものであることを、誇りとすることも決して卑下してはならないと思う。

それから昭和初年頃フオルマリズム藝術論が横行し、「形式は内容を導きだし決定する」という形式主義の根本理論をふりかざしたものであるが、それは所詮形式偏重の所説であつて、唯物論に立脚し情緒、空想、感興、熱情と云つた精神的、心理的ものの優先を否定し「総て物質、具体、行動、事件、生活環境が精神的なものを生む」と考え、「物質を表現すれば自ら

「折詰」

麻生 路郎選

佳作

枕許そこで折詰あけてやる

徳島県 きかん坊

折詰にわかさがあある旅に來て

池田市 古 方

恋人と行く折詰を母にさせ

貝塚市 千 舟

箒目を崩し折詰運ばれる

神戸市 ふたよ

折詰も遂に幾票かを稼ぎ

和歌山市 宏 方

折詰の日は板前もマスク掛け

津山市 天 任

敬老の折詰みんな提げて去に

愛知県 無 方

山海の珍珠無慘に折へ詰め

大阪市 啞 醉

折詰へ「不肖末席」まだ続く

四日市市 送

折詰は三等重役以下が食べ

大阪市 一三夫

折詰に箸さえつけぬ飲みつぶ

大阪市 謙 次

折詰をちらと横目のパトロー

神戸市 安

折詰の足は我が家へ向つてず

大阪市 小松園

笑い乍ら包むおむつと折詰と

大和高田市 日本村

# 同舟近詠

精神が生れる」と考ふる行方であつた。これを詩について云えば「新しい形式からこそ新しい詩の内容が生れる」と云い「新しい強固な、物質的な、具体的な、機械的な、数理的な、詩の形式（様式ではない）を発見しなければならぬ、総てよきものは形式に於て出発する」と主張したのである。更に唯物的形式主義者

「生活の上で形式を重んじ、生活形式にまで進展するが故に現代的強味を持つ。現に吾々は生活にいゝ形式を興えようとして社会主義者になり、又は唯物論者になり形式主義を主張するのである。生活の充実と発展とは常に生活形式に更に新しい形式を積み重ねる努力である。此処に吾々が文学者としての社会的

松山市 前田 伍健

街ろくのおひるの中に鶴一羽

浪曲師ぶらりと晝のパチンコ屋

秋ふかし遠三味線は夜のもの

内閣座弁慶役で毎度もめ

喫い殻に以た俺だよと老いた友

東京都 富士野 鞍馬

約束を一つ欠席させる雨

戦災のきすはいまだに漏るまんま

世の中は金 團十郎も金

男堂に議席のあつたのに氣づき

大阪市 橋本 緑 雨

パチンコに誘れた方がちと儲け

八瀬 大原

日用品も頭のにせる大原女

玄関の妻に満月教えて居

捨てられた女に逢えば金づまり

連れている女にパンパン見せるなり

役目の一つがある」とその本心を打明けているのである。しかしその後社会主義者、マルキストから優れた文学者、優れた詩人が輩出していないのを見ても、このフォルマリズム藝術論が一つの思想運動の上から出なかつたことを知るべきである。

形式というものは尊重しなければならぬし、本来の意味における形式の美を生かさなくしてはならぬが、所謂形式的に流れて生命のこもらぬものになつてはお仕舞である。豊かな内容、盛り上る内容、厳しい内容から、これにふさわしい力強い、或は心よい形式が生れ全き表現が得られるのである。張り切つた精神的内容がよき形式と表現を通じて、肺腑を衝き人を感動せしめるのである。

▽それでは川柳内容の種々相にはどんなものがあるでしょうか。

○それこそ千差万別であつて簡単にこれを述べることはできない。現に万句合、柳樽の昔から現代に至るまで、川柳の数は幾百万句発表されたかわからない。今後もおそらく永久にわたつて続くことである。それでここに類型学的

分類を試みることはできる。これは古川柳をはじめ従来の川柳から抽象的に仕訳するもので、元より大ざつばな分類ではあるが、川柳の内容が奈辺に存するかをうかがい知る一つの目安にはなるであろう。

第一の分類は思想的背景を持つた句である。これには人生観、社会観、世界観、宗教観などが盛られイデオロギー、政治、経済、文化等々の思索、批判が試みられている。

第二は生活感情を詠んだ句で、生活の楽しさ美しさ苦しさ、心境、感激、哀愁など個人生活の日常性が織り込まれている。第三は即興的な句で、機智、諧謔、洒落、揶揄などが躍り出ている。第四は正義感に立脚した句で、警世、諷刺、皮肉、階級闘争、義憤といった意欲を盛つたものである。第五は哲理を詠んだ句で、人情哲学、世間哲学をはじめ禅味、超然味、さとり、虚無など冷静に凝視したものである。第六は人間味中心の句で、人生葛藤を主とし愛情、感傷、情緒、恋愛、児童愛、性愛等人間探求に根をおろしたものである。第七は所謂俗の眞を詠つた句で、一

折詰へ二度目の電話借りられる 青森県 織之介

入選第三席

折詰のあぶない物は母が食べ 熊本県 芳 仙

入選第二席

折詰へ隣も同じもの残し 大阪市 わたる

入選第一席

今朝の記事この折詰も案じさせ 大阪市 杉太朗

十月十一日放送

## 川柳雑誌

バックナンバリー御入用の方は往復ハガキにて御希望の号教記入の上問合されたい

旅 旅 旅

つ な 家

大阪市南区長堀橋筋二ノ二

(道頓堀日本橋北詰西側)

電話 7238

種の風流を藏し世態職業を遁じて穿ちの妙味を發揮したものである。第八は写実美の句で、軽み、写生を主とし自然美、風俗美、純情美、無邪氣な美を取扱つたもの。第九は感覺美の句で、スポーツ、演劇、美術、音楽、映画、勝負事、健康感などを通じて感覺のスリルを詠つたもの。第十は理想美の句であつて、虚構、空想、幻想、追想の限りを盡し藝術至上主義的な美を構築せんとするものである。以上十種の分類を試みたのであるがなおこの外の類型もあるだろうし將來更に新しい創意が生れてくるであらう。けれどもそれらの分類を要約するものはおかしみの詩情でなくてはならぬ。総元締はおかしみにあるのである。おかしみの原理に立脚し、出發し婦納するものでなくてはならぬ。おかしみの原因は睡眠の原因のように不明であるが、目的は人生を明朗にし快活ならしめ、世の中を正しく住みよくするにある。おかしみは人間の健康上必要なものであり、健康だからおかしみが生れる場合が多い。

葎乃氏は昭和十四年の頃「川柳鑑賞」と題し川柳の内

容について述べられた。それは七つの峯に分けられ、人間や世の中の出来事を批判する、人情のこまやかさを詠む、人間世態の喜劇を拾い上げる、人間世界を諷刺する、抑捺的役目を果たす、恋を歌う、童謡的な境地を詠むことがあげられてはいるがその前文の言葉の中に教えられるところが少くない。「昔から、川柳は寸鉄人を刺すと云われては穿ちとか、皮肉とかいふものであります。それから段々と枝葉が分れて、最近では殆んど、穿ちとか皮肉などは何処にあるのかと思われるような句も見受けられますが、そんなものでもよく味つて頂けば、必ず川柳の生命ともいふべき人間味を持つています。決してあの世のものではないと背ける脈搏が通つています。総じて皮肉やユーモア味たつぶりの句は我々に痛快な感じを興えたり、余儀なく苦笑せねばならぬ破目に陥らせたりするものですが、こう云う句は、外界の出来事、人間の動作、人間の心の動きなどを理智の瞳で靜かに観察して

生れた句に多いようです」(昭和十四年五月号本誌参照) △内容の貧弱、陳腐を救い、如何にして内容を深めるべきでしょうか。 ○先ず内容の陳腐と云うことから説明すると、これは魚や野菜の場合と同じように鮮度のない生きの悪い代物のことで、作品のテーマなり着眼点、着想において既に先人が詠み古した句境のもの、固定した觀念に捉われた句、觀察に動的飛躍や意表に出た点のない句、技巧のうまさやリズムの力強さ心よさのない句などは陳腐と云わねばならぬ。更に内容の貧弱な句と云えば、感傷が浅く或は小さく燃焼の足りないもの、着眼、着想が平凡で單純單調或は皮相のもの、独創性に乏しく個性が出ていないもの、概念的、觀念的及び抽象的な句がこれに該当する。以上のような句の貧弱、陳腐を救うには、感受性を豊かに、觀察を精密に、感覺を鋭敏に、思索を透徹に心掛けると共に、句を多説多作して自得の度を高めることが肝要である。勿論詩人的資質に負うところが少くないが、努力と練磨と体験によつて句の内容を深め充実せしめるこ

とは必ずしも難事ではない。そして斯様な修練の道に並行し或は先行して大切なことは人間修業である。常に智情意の本性を磨き、眞善美の理想を掲げ、正義と愛情の心を押進めて苦惱に堪ゆることである。そこから冷み出る川柳味こそ本物なのである。 路郎先生はかつて近作柳樽の選句総評で次のように述べられた。川柳の内容を高める示唆多き一文であるから熟読を望みたい。句はその人のころである。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である。一句一句味わつて見たが、のんびりさが足りない、鋭さが足りない、朗らかさが足りない、暗さが鈍重さも足りない。艶つぽさも、枯淡さも感傷味も諧謔味も足りない。これではまだまだいけない。その病源が何処にあるかと云えば生活の機械化にまきこまれるからである。役者自身が笑つては喜劇が逃げる。それは喜劇役者にとつて致命傷である。颯風は颯風で吹かさねばならない。吹いたら驚かねばならぬ。そんな時に眼を伏せてはならぬ。颯風が吹いても、颯風

を金儲けの種にする人は普通人と別の神経が働いているのである。私たちは颯風のように音をたてて來ないもので、モツと怖しいものに、毎日の様に直面している筈だが、それは氣づかないで、風や水や火にだけ怖れたり驚いたりしている。それではいけない。それから、狭い自分の周囲ばかりを詠つている作家は、時々そこから離れて見る必要がある。あちこちに、眼を心を奪われ勝ちな作家は、小しく自分の手近に眼や心に向けて見る必要がある。と云つたようなことも思わされた。(後略)(昭和九年十一月号本誌参照)

宣傳用に!  
御贈答に!

製造 販売  
城 澤 商店  
事務所 日本橋北詰  
大阪府南區長堀橋第二ノ二  
電話 7315 番

カレンダー  
卓上日記  
印入手帳

# 一路集

## 急病

北川春巢選

なおるのも急病らしくあつけない  
 急病で死んだあつけない知らせ  
 遺言もなく急病で旦那逝き  
 急病で死に長命も惜しまれる  
 急病で逃げ廻つてる金詰り  
 世帯慣れして急病の嘘も云い  
 鶴首して急病の知らせ待つ小僧  
 急病へ落着き見せた博士号  
 急病へ医者も少しはあわて居  
 代診の急病と云うあわて様  
 急病へ元看護婦もちとあわて  
 急病へ来て税務吏がうろたえる  
 急病へ医者も急病ですと返事  
 急病へ医者と天理教鉢合せ  
 無医村の急病籠で山を越え  
 急病へ医者は縁側から上り  
 急病へ晩酌中ですとも云えず  
 急病へ手当て尽した手を洗い  
 急病へ医者は仏の顔に見え  
 急病へ医者が来る間のお題目  
 急病に祖母はみ澄しあげ給い  
 急病の母はやつぱり炎をすえ  
 病棟に急患があるさわがしき  
 急病に夜の病院の闇破れ  
 急病の妻へ喰はれ何処塩は何処  
 急病の妻へ慣れない粥を炊き  
 急病の子供毛布に包まれる  
 初孫の吃驚させる熱を出し

ひきつけへバ、の鼓動はなり止ま  
 ひやかされ持つた受話器に子の病  
 急病へゆうべのおかず尋ねられ  
 飲み過ぎと妻には云えぬ胃薬  
 酒飲めぬことが急病うらめしく  
 急病になつて友情有難し  
 急病で嫌な女の世話になり  
 急病に冷たき声は話中  
 急病の電話も知らぬ梯子酒  
 急病に専門外の医者が来る  
 急病に近所の医者が間に合わず  
 急病へ近くの医者は借りだらけ  
 急病へ腰の軽さも開業医  
 急病へ用のないのが走らされ  
 急病へ八百屋のりヤカー借りて来  
 急病へ氷枕も借りて来る  
 急病でプランこわれた日曜日  
 急病の友にすまないハイキング  
 急病の看病に来たような旅  
 急病の枕元女甲斐々々し  
 急病へ一号二号の顔が会い  
 急病へ女世帯の弱さ知り  
 急病へ仏縁と云う顔が寄り  
 急病へ男まさりもへたり込み  
 うめいてる背から暴食まだ叱り  
 医務室の欠伸へ急病駆け込み  
 急病へタクシードがバンクを  
 急病と知らず基敵やつて来る  
 急病と知らず待ち呆け腹を立て  
 貯めるだけ貯めて心臓まで死に  
 急病へ不気味な地震まだつゞき  
 急病へ富山の薬たしかめる  
 急病へ効能を讀む置き薬  
 急病と云うて無燈火救される  
 花形の急病代役へ黒ん坊がつき  
 急病へ停電をした街の色

英子 佳急病で二号邸から入院し  
 佳急病へのんびり廻る扇風機  
 佳急病へ引ずるように医者をつれ  
 観月 佳急病の知らせバンクのまゝで乗り  
 秀限 無急病の知らせバンクのまゝで乗り  
 方眼 人急病の父へ我が肩小さ過ぎ  
 葉留路 地急病へ家の電灯みなともし  
 七面山 天急病の早速ひびく暮し向き  
 良太郎 軸・宝くじは当らず急病には懼り

## 嵐

國弘半休門選

デパートへ嵐をさける客となり  
 そのものがずばり拍手の嵐なり  
 嵐の日だけはパチンコ家へ行き  
 嘘の上に晴れて嵐の去つたあと  
 臨月の妻と嵐にだまりこむ  
 川端の柳に狂つて狂つて嵐  
 山陰に住んで嵐に馴れて生き  
 タクト今嵐のような拍手受け  
 暴風雨一きは夫が頼母しく  
 夏やせとかくし切れない世の嵐  
 嵐の前ぶれ雲が急いでる  
 こゝばかりに嵐吹くかパツツ家  
 蟻螂の奔に似て嵐に向ひ  
 風向きは何れも嵐だ窓をしめ  
 山の神の怒りか嵐つり行く  
 妻黙す嵐の前と言ふ構え  
 神風を信じた過去を吾も持ち  
 パツツが嵐まともに受けて建ち  
 母として気の落ち着けぬ嵐吹く  
 大枝をゆすつて嵐吹き止まず  
 風やつと落ちて厄日は黄骨れる  
 飯出所娑婆の嵐がこたえ過ぎ  
 屋台そば嵐の気配湯をおとし  
 貧困の果にも嵐容赦なく

七面山 二三枚瓦が飛んで嵐過ぎ  
 一嵐 あばら家のうちだけ嵐吹いて逃げ  
 満年 責任は嵐にめげず行くといふ  
 美秋 嵐にもめげず記念の木が育ち  
 斗志 月がもり日がもる庵へ嵐訪ひ  
 斗志 神経が尖る宿直の日の嵐  
 斗志 人生を生きぬくための嵐うけ  
 斗志 処女でなし嵐の後の花に似て  
 四季無 黻面は嵐を越した五十年  
 春巢 野分けの風みのり田面にこぼ  
 生還はもう山などに登るまい  
 教会の鐘へ嵐の吹きつり  
 傘三分開けて突つ込む暴風雨  
 知らぬ間に汽車は嵐の中を行く  
 人間の無力を嵐に教えられ  
 虚秀 秀風鈴が無茶苦茶に鳴る嵐の夜  
 富至 秀六十歳六十年振りの嵐といふ  
 春雨 秀嵐過ぎて蜘蛛は再季を考へる  
 雄々 秀嵐過ぎて大川に下駄流れ来る  
 夢生 秀嵐過ぎて大川に下駄流れ来る  
 去水 秀花に嵐人生の波濤え切れず  
 一糸 秀ひどい嵐でしたと庭の花を掃き  
 玉露 秀真黒な嵐の中へ発車ベル  
 芳泉 秀秀嵐止むらし恐々虫が鳴き出した  
 夏六 秀秀嵐止むらし恐々虫が鳴き出した  
 五風 秀秀嵐止むらし恐々虫が鳴き出した  
 粗粒 秀うどん一杯嵐を衝いて届けられ  
 一舟 秀嵐の夜母念仏の珠数を採み  
 春巢 秀急行の汽笛嵐を突つ走る  
 妻揚子 五人住んで鶏舎嵐に良くたへる  
 呆声 五人垣の位置が嵐の向き教へ  
 燈一 五人シグナルの光がにぶい嵐の夜  
 木魚 五人幾度か嵐を抜けた松の枝  
 馬洗 五人嵐から家につゝかい棒が要り  
 代仕男 五人嵐の様に嵐の中へ出る  
 朴仙 五人鬼瓦グツと嵐をかみ殺し  
 四季無 月走り応ぜず嵐の中を行く  
 意坊 嵐又人の命をさらつたり



## 句評五句

九月号より編輯局提出

福田山雨樓  
大鶴喜由  
藤本満年  
國弘半休門  
佐野ト占

留守番をすれば集金ばかり  
来る

(桜川不水)

山雨樓 〓年中臥床留守番をして  
いる自分には常に経験する  
ところである。しかしたまに

留守番をして集金屋の應接に  
出ると又かど氣に障ることで  
あろう。喜劇的な皮肉であ  
る。叙法には難点があり「す  
れば」は贅肉、推敲の余地が  
ある。「ば」の重複に雑音を  
感ずる。対照的な句に薺花氏  
の「留守番の裸へ邪魔な御用  
聞き」がある。

喜 由 〓恐らく体験の句と思  
うが新鮮味がない「すれば」の  
説明を抜いて留守番対集金の  
状態に文字を加えたい。留守  
番と押賣り、留守番と炊事、  
留守番と土産待つ心、留守番

をする日数が重なる程妻のい  
い面が目にとらつていてそぞろ  
恋しくなる等留守番はいい川  
柳の題である。

満 年 〓たしかに留守番は川  
柳のいい題ですな。

この句は留守番に経験の乏  
しい人の体験句であらう。  
「すれば」は贅肉にはちが  
ないが、留守番の頭へ、たま  
さかにとか、初めてとかの意  
味を省略したものと解すれ  
ば、「すれば」という表現に  
なり易いようである。境地と  
しては共感を呼ぶものがある

が、梨里さんの「一人居て鼠  
如きにおどかされ」などに比  
し、新鮮味はない。  
半休門 〓句主不水氏は海上生  
活者で常に留守番をする機会

はない筈であるから、この場  
合も久方振りの意が多分にあ  
る訳であろうがその点言い足  
らん点否むしろ表現の弱さが  
ある。特に私は不水氏の性格  
を良く知つている関係上、氏  
のものした句としては上出来  
ではない。氏にはも少し鋭い  
川柳眼がある筈である。

ト 占 〓新鮮味に欠けた点は  
同感ですが、留守番をさせら  
れ最も厭な集金の断り役を言  
外にふくんだ皮肉がこの句を  
引立て、いる。

山雨樓 〓この句に対して新鮮  
味の不足を云々するのは当ら  
ないと思う。新鮮味と云うこ  
とは句の價值をさめる上に重  
要な要素であるが、それは必  
ずしも新事実、奇抜な着想、

珍らしい出来事に限るもので  
はない。何億万年続いていて  
も太陽の光は日々新しく、人  
間の生活感情は常に繰返して  
いるが日々新しい。藝術に  
おける新しさはこれに接した  
とき、今日の良識的鑑賞にお  
いて心情に訴えるものがあれ  
ばその作品には新鮮味ありと  
云うべきである。この句の場  
合句主は新しい感動を覚えた  
のであるが、これを藝術的眞  
実をもつて表現し得なかつた  
点が批判されるのである。

喜由 〓山雨樓氏の新鮮味云々  
のお説はうなづけるが如何に  
句主が新しい感動を覚えたに  
しても、評者にピンと来るも  
のがなければ致し方がない。  
ただ莫然とありふれた句だと  
してでなしにこまかく分析し  
て見て評者の心情に遺憾なが  
ら触れるものがない。勿論評  
者の個性と達識と「川柳雑記」  
の色の認識などにもよる。

満 年 〓私はやはり新鮮味を  
感じない。生活のなかにこの  
ような小さな感動のあること  
は認めるが、今さら新しく  
感じる感動とは思えない。

ヒドラジツドまた新しい愚  
痴となる

(家沢葎花)

山雨樓 〓この薬に期待をかけ  
て服用している自分には切実

である。最近厚生省結核療法  
協議会の研究発表の結果は余  
り芳しくない。この句は世界  
的反響を呼び興した新薬への  
世俗的客観的批判を下してい  
るが、主観句とすれば痛烈味  
がある。

喜 由 〓また新しい愚痴で生  
きている。一度はストマイ、  
二度は、ペス、三度はチピオ  
ン、四度はヒドラジツドと胸  
を病む人の悲願はつゞく。結  
核菌は体外に出ると案外弱く  
日光でもリゾールでも参つて  
しまうのに、体内では猛威を  
奮う。元來榮養、日光、安  
静、薬と療養の順がきまつて  
いるが之からは医学の進歩で  
逆になるかもしれぬ、ヒドラ  
ジツドは食欲の増進もかねて  
私の居る病院では成績を上げ  
ているからそう悲観したもの  
でもない。

満 年 〓この句は時事吟でし  
よう。どんな新薬が出来ても  
必ず副作用があつたり、抵  
抗菌が出来たりするもので  
す。ヒドラジツドに限らずい  
まままでの新薬はみなそうで  
す。新薬を新興宗教のように  
有難がること、終にはまた不  
足をいわれねばならなくなる。  
川柳の批判性を詩にしたもの  
としてなか／＼面白い。

川柳の批判性を詩にしたもの  
としてなか／＼面白い。

半休門 新樂かならずしも新しい愚痴となるに定つてはいないであらうが事難病の新樂であつてはじめて新しい愚痴が利いてくる訳で、句主の主観の句であつてこそ更にその深みを感じる。

ト 占 病氣の惱み殊に胸を病む者にとつて次から次へと發表される新樂に対する期待と信頼、それが期待に反した時自ずから愚痴が出て來るのは当然であるけれども共然として受けとれぬ処に病人の惱みがある。そこを巧みについたのがこの句である。

氣短がじつと堪えている  
パーマ (東喜久堂)

山雨樓 句に新味が乏しい。パーマと云う流行風俗に対する批判、諷刺、滑稽などが感じられるけれどもこの句はそれを主眼としていないようだ。短氣な女だが己の美容のために焼けつくような頭の熱さをこらえているというありふれた滑稽を見付けたのが山だ。

喜 由 内容が句を生かす。句が内容を生かす場合がありとすればこの句は句が内容を生かしている、氣短がじつと堪えてるパーマネットではものにならぬ、世の中は變つた

ものでパーマネットに火がついてとからかわれながら増えて來たものだ。結局日本髪に較べて見栄がよく、寝くづれがなく、手入れに時間がかからず、一度あてたら六ヶ月以内はもてるし、人妻が娘にも見える等の特典がある。

満 年 〓 私はいつも思うのですが、川柳をも含めて文學は読む人に訴ふる力をもつていなければならぬ。従つて通俗的なテーマの方が教養の有無を問はず廣い範囲の人に訴え得るにちがいない。しかし通俗的なものはとかく作品として藝術性に乏しい場合が多い。この句も通俗的な点では多く人に愛されるが、これに近い境地は詠み古されているので、創造性、藝術性ではやや低いものではあるまいか。

ト 占 〓 この句を拜見してのと独りで顔のこはばつたのがほぐれる様でおかしみがわいて來る既に沢山詠まれてるパーマの句では蓋しすぐれた方でしょう。

喜 由 〓 満年氏の通俗的或はこれに近い境地は詠み古されているので創造性、藝術性ではやや低いものではあるまいかはうなづけるが私が思うのには日常通俗語を使いながら川柳

寸劇が至るところで生れていて。要するにそのテーマに対して最もピツタリ來る言葉を見つけねばならぬと思う、私は俗に落ちず俗に離れずのころからいゝ句を生みたい。俗の中にもえも云えぬ創造性、藝術性があると思つた。

半休門 〓 山雨樓氏の所謂、新味に乏しいといふことを否定する訳ではないが「内の家内は頗る氣短かで、家では八ヶ間敷しく言つてゐるがそれでいて、パーマを掛けてくるから滑稽だ。よくもじつとしてあの熱い電熱に頭を突つ込んでゐる」といつた風に相像すれば穿ち味は十二分にあると思ふ。

殘業殘業といつしか孕んで  
た (佐藤まさる)

山雨樓 〓 無技巧な句のようであり、荒けすりでラフな感じを受けるが、それでいて表現の効果を収めているから妙だ。多忙と疲労は反射的に性慾の興奮を呼び起すと云うセックスサイエンスの盲点を衝いてゐるから更に妙である。

喜 由 〓 無技巧の技巧と云うべきか。第三者が投げつけた皮肉である。いやむしろ岡焼連が受けた羨望かも知れない。私は未成年以上の娘と見

たい。勞基法は成年の女子は深夜業は認めないが九時迄の殘業は出來る筈である。殘業を口実に逢うて孕んでゐる。この句のリズムは九、九から構成されている。基準の十七字の概念を抜きにして八、九、八、七等自由に作句すると意外な收穫があると思ふ。

満 年 〓 この句は二つの解釈が出來る。一つは殘業で毎夜遅くなり、疲労もするので妻君と睦む時間もないと思ひしに妻君は妊娠していたといふのと、一つは職場の若き女性か、両親は殘業と偽り、実は逢引していて孕んだといふ場合で、アブレ娘の亂業として後者をとる方が面白い。破調、荒削りが却つてアイロニーを利かす効果とはなつたが、句品がない。

半休門 〓 私も満年さんと同感だ。そこで考えさせられることは下五を何んとかしたいものだといふことになりませぬ……それからも一つ〓〓についても訂正をおすゝめしたい。

ト 占 〓 貞操なんか全く顧りみられなくなつた今日の狀態を心にこい迄表現している巧みな句と思ふ。

大阪が生んだ世界の  
**アサヒビール**

半休門 〓 私はこの句を最初読



# 近作 柳樽

路郎選

婦人科でそんなに診るなと言<sup>キ</sup>和歌山県 秋月 宏方  
 今日からのあなたと並ぶ貸浴衣  
 掃除婦がキツスマごもに見てしま  
 天命全うしても螢は二三日  
 薬石効なく生れ薬石効なく死し  
 煽風機買はない客の方も向き  
 尋卒であるとは見えす自家用車  
 舗道とはとぼく歩く道でなし  
 無理矢理に水をのませる愛護デー  
 政党もわたしの家もめ通し  
 落選はしたが其後は女史となり  
 死線越え越えて世に出た混血兒  
 じりく文官偶へ押しくられ  
 罪人の方の人権尊重し  
 新興へ老舗の廣さ半分貸し  
 人傳てに聞けば先妻肺をやみ  
 女房がかせぐせいだと言はれまい  
 二号邸浪曲ばかり買つてくる  
 まるく寝る癖のまんまで結婚し  
 不承知でない首すじをみつめられ  
 銭湯へ借金取をさげにゆく  
 聞きとれぬ声でお悔み言うて去に  
 岡山県 井野 格一  
 勉強をする子へ外がうるさすぎ  
 氣味悪い程にあつさり負けて呉れ  
 泣落しに負けて戻らぬ金を貸し

当選をすれば高級車に揺られ  
 黙否権指紋に勝てぬ事が出来 石川県 桑山 ことよ  
 金策に來た友達は死で居た  
 喰えぬから妾も避妊して居ます  
 大阪に娘が居ます萩の茶屋  
 大井は生れ付きよと言返し  
 風呂屋の娘あんな身体へ嫁ぎたし 和歌山 浅川 桑南  
 暗記までして置いたのに籤がそれ  
 供託金沒收されて名を残し  
 東京へ出ても紀州の粥を炊き  
 アブレとは我子であつたあわて様  
 脊なの兒に一本買つた赤い羽根 岡山市 津田麦太楼  
 からたちの垣から赤い鏡掛け  
 障子張りかえておでん屋客が落ち  
 五十目を朝まで喰わす女房也  
 嫁が來てから母上の不眠症  
 御手紙へ神経質が手を出さず 岡山市 山本 焦兒  
 どんな事したのか白痴叩かれる  
 弱震へ一家の柱はだしなり  
 人妻へほど良く効いたアルコール  
 スクータ譯ねる家が見付からず  
 うさぎ山羊牛に花嫁ふり向かれ 具塚市 河揚 梵鐘  
 隣家とはいうても隔を一つ越へ  
 スツポリと髪を脱げば喜慰斗さん  
 アベツクの土手へ月光ふり注ぎ  
 桔梗摘む子へ信号は赤いまゝ  
 手切金兒の顔も見す名も知らず 津山市 定金白柳子  
 秋風や失業保険もうくれず  
 疎開十年金を集める役がつき  
 やけくそになつた女と知らず惚れ  
 確實と皆書いてある避妊藥 岡山県 岡田 青果

んだとき満年さんの言う前者であつて  
 ほしいと思つた。そこで下五が氣にな  
 つた訳でアブレ娘の場合なら避妊新藥  
 や注射の良く効くこの頃恐らく妊娠し  
 ないのが本当だろう。  
 ト 占||避妊藥や注射の良く効く今日  
 此頃でも墮胎医者の繁昌しているのは  
 やわりアブレ型の多い爲ぢやないでし  
 うか。こうした状態は度々耳にする事  
 です。以前会社の勞務を担当している  
 時、女子工員が婦人科へ入院してお  
 ろしたと云う噂を耳にした事がありま  
 す。アベツクで映画へ行つても 家で  
 は殘業くく云つていた様です。  
 程々に歸る氣あいつちばかりうち  
 (松永四季無)  
 山雨樓||人情の機微と云うものであろ  
 うか、こうなることもなす方では意識  
 的に引き止めようとし婦りは益々遅く  
 なる。社交は斯くして時間を浪費する  
 ことが多い。路郎先生は九月号の窓口  
 談義でパツクボーンの軟弱な川柳家に  
 ついてのべられたが、この句の類であ  
 るう。  
 喜 由||内容はよく出ているが文字の  
 面が何とかならないものかと思ふ。五  
 葉さんの句に、「そうですともそうです  
 ともと立話」と云うのがある。こんなそ  
 うですとも似た言葉を使つて階級を  
 現わすのも面白い。  
 満年||程々にという上五は省略法と

キツスしてやつも孫に嫌はれる  
 もうあとが無言えぬ酒を注ぎ  
 俺の名がビリに出てゐる紳士録  
 氣まぐれな化粧夫にひやかされ 大阪市 竹内花代子  
 二階からマツチ一本借りに降り  
 お彼岸へ嫁と姑の仲がよし  
 部屋見舞妓の手から届けられ  
 前うしろ見て去る猫がいと憎し 米子市 小西 雄々  
 お化粧はマネキンほどに上手なり  
 陳情 え前も後も金の事  
 別れる日女の冷たい手に氣付き  
 洒落の無い課長で随分くたぶれる 岡山県 藤井 呆声  
 パチンコで遅蒔き乍ら儲ける氣  
 金のある一人へ皆んな引きづられ  
 金持の娘お師匠はんも持て余し  
 おうむ曰く君はセンチになり過ぎる 鳥取県 日置 文笑  
 パラ曰く主人は感傷主義者です  
 蔵相に喰わせたくない米を刈り  
 就職をしたさマルクス脊へかくし  
 点滅のネオンへぶらりミスボリス 宮崎県 野口卯之助  
 享主をば養子のようにこきつかい  
 青空へ金がほしいとつぶやいた  
 よくしやべる女の唇を見てゐたり  
 雑草は思いのさまがよし 岡山県 國枝 朴仙  
 胃で寝ればフ、ンと鼻であしらわれ  
 ボケツトにパチンコ玉と胃の薬  
 前生の約束事か耐で死に  
 啄木が好きで鬮を焼く生活 東京都 松井 清志  
 一票へいましき迄に声はかれ  
 恋文に誤字を見つけしあぢけなさ  
 かくもろき感情霧の夜をこぎす

まだパーマかける氣白髪染なをし 愛媛県 村上 旭童  
 方言で聞く手もあつた署長室  
 人生のエアボケツトだあせるまい  
 おそろしやこんな孤島へ藥賣  
 採用の通知パチンコ屋へ急使 広島県 黒本 芳泉  
 口実が出来れば女太くなり  
 奥様が恐いんでせうさから來  
 御時世はお家柄など言ふとれず  
 戦友でしたと奥さんえ名乗り出る 愛媛県 渡辺 曉童  
 昔も今も本は私に買えない價  
 一升瓶の高さに水屋仕切られる  
 お祭りのひげめ敗戦以來なり  
 にや／＼と聞いて、あげ足はかりこり 倉敷市 野田 純男  
 恩返しのもりへ嬉し泣きをされ  
 草野球ランナ遂に靴をぬぎ  
 不幸みな背負うてるよな手紙くれ  
 酒の量聞けばあなたにまけまへん 高槻市 手島 一舟  
 しんみりと話せる人で世話が好き  
 負けて來たパチンコ荒い音をたて  
 犬までが米喰ふ子供またふやし  
 ハネムーンこんなわたしでなかつたに 大阪市 石田 沐天  
 こんどめの式は間借りの高砂や  
 おれたちへテナーべらん奴節のよう  
 十一月四角で來たわいな  
 一票を入れた日夕刊買うて去に 大阪府 森本黒天子  
 喜ばすことばかりして阿呆にされ  
 流行る医者あんなに低い腰にさせ  
 未亡人ナイト俱樂部へ耳を藉し  
 先輩の祝詞はいたいどこにふれ 玉野市 渡辺あきら  
 満月へ盗まれそうに柿が熟れ  
 競輪へ前も後も賜暇をとり

しては巧みである。單なる儀礼にすぎない。大して尊敬もしていない氣持がよく判る。人情の機微をよく働いてい

半休門 〓私もこうした考えを持つた事がありまして誠にいたるところをつか

れた感じですが。どちらかといえはす

ら／＼といつてのけていて好きな句で

す。

ト 占 〓同感です。私は職業柄こう云う状態にいつも出合います又いゝ加減に帰つてほしいと思ふ様な場合も度々あります。こうした場合には、程々に歸す氣と云う事になります、明朝一番列車で旅行する爲準備もせなければならんのにくだらぬ事許りくど／＼と話し込まれては全く閉口の至りです。實感句として頂けます。

社の告知板

★ 十二月七日午前十時から山陽新聞記者川柳大会が岡山市の同社講堂で開催される選者としての路郎主幹夫妻は六日午後から西下される事となつた。

★ 岡山県下並びに近県に於ける本誌の不朽洞

瓶の銀山

大阪府大津市長柄  
西通一丁目四四

山銀硝子株式会社

常設場川四七七番

コスモスを上げまよ秋は流れ行く 同  
 青春の夢に都会は汚なすぎ 大阪市 吾郷 玲人  
 儲けさす話都会の午前二時 同  
 安樂死など、冗談とも見えず 同  
 警官と同じ電車と同じ路 同  
 牛賣つた金を女に吸ひとられ 岡山県 森永 天明  
 あわてもの箸をさかさに又握り 同  
 感情がもてて本家へ近寄せず 同  
 欲声を聞かせてアナは息を次ぎ 岡山市 宗高 ハツ  
 求職へ帰農すゝめて一夜泊め 同  
 日直が来て宿直は齒を磨き 同  
 未だ耳に煙草預ける人が居り 高田市 岩垣 俊雄  
 逮捕状哀れ一金二千元 同  
 人心はつきり見せ選挙すむ 同  
 七球はこうだと一んち鳴らす家 貝塚市 芝 無骨  
 秋なれや邪恋の果てをさく寒さ 同  
 終電車素面の一人に僕がいる 同  
 まだ止まぬ雨へ淋しきものを知り 和歌山県 滝谷 右郎  
 昔とは違ってお伊勢の砂利の音 同  
 東京のお客へ莫座を裏返し 同  
 送金の嬉しさ印肉つきかねる 今治市 越知 一水  
 ハイキング女が行かぬで止めになり 同  
 田の作り妻がさしづの日曜日 同

自嘲  
 胃の悪い男が菓子をよくつまみ 鳥取市 森本法泉水  
 T氏退職 同  
 停年と云えば故郷をさゝたがり 同  
 八方菜氏長逝す 同  
 出勤簿死亡と書いてはすされる 同  
 薄給がつりはいらぬと見栄を切り 赤穂市 川西 去水  
 犬猫であれば捨てたに子沢山 同

貧乏してもやつぱり暑い日はっく 同  
 皮肉言うときの婦長の二重顎 貝塚市 上坂 朱人  
 吹けば飛ぶような男がまたもてた 同  
 新柄を見せに來ましたPTA 同  
 焦げついた借へ支店長また代り 和歌山県 那須 虹兒  
 税金を値切つた足でビヤホール 同  
 脱税の手段二号に教えられ 同  
 赤い羽根つけて見舞の妻が來る 貝塚市 堀井 一峰  
 犬でさへ六匹の仔を養うに 同  
 こんな処に栗が落ちてる秋の空 同  
 頓死して始めて知れたお家柄 京都市 松川 杜的  
 試歩の杖路傍の露に濡れて來る 同  
 保険屋の約束違えずやつて來る 同  
 食欲のない顔が待つ内科室 米子市 小西 雄々  
 サービスはローカル線のせいに 同  
 ブラットの風が冷たいひとり旅 同  
 外人が降りるを待つて乳呑ませ 出雲市 佐藤まさる  
 議員章の夢も空しく羽根を付け 同  
 七歳にして基地の兒は腕を組み 同  
 僕一人はつたらかすも山の宿 東京都 田中 稻水  
 スポンヂの乳房と知らず眼を見張、 同  
 孤独感せめて猫の背なでゝやり 同  
 付添の貰うたらのむと云うタバコ 京都市 村本 香果  
 女房に云われる迄の不精髭 同  
 パン食にコンロつめたさまの 同  
 絵の様な後姿が氣に入らず 兵庫県 吉原 紅月  
 遺産などなくて兄弟仲がよし 同  
 松茸の匂い八百屋の前と知り 同  
 昔なら手打慰藉料まで取られ 愛媛県 藤田 博人  
 見透した通り喰うのに困るなり 同  
 無條件に叱られて居ぬ妻となり 同



# 雑筆 春秋

## 最悪の日

日置文笑

昨日迄元氣一ぱい勤務を続けていたのに、運命か、今日の定期健康診断で、胸廓成形手術をすゝめられる身となる。

生きることも死ぬとも云わぬ医者のお病院の門を出る時、妙に悲しくもなく、放心した様な氣持だつた。途中で知人に出逢つたとしても、おそらく氣が付くまい、自動車と衝突せぬのが不思議な位だ。

発病で意氣鎮沈の足重し  
 写真屋が眼についた。一枚写して置こうか、当分、いや永久にこんな機会はないかも知れない。

写される氣も知らないで笑へとは  
 街は相変らずチンチャラ／＼軒並パチンコの音。

パチンコの音は入れと云う誘い  
 映画館はと見れば、赤い河、血と砂、心の旅路、いずれも見たい洋画ばかり。

今日からは映画見れぬ身を嘆き  
 思い出は二枚重ねた入場券の手  
 署へ帰ると、久し振りの木材大量公売で  
 署内は数十人の入札客で立錐の余地もなし。

これがまあ最後の勤務か入札筆記  
 経過中の書類など、あわたくししく整理し

スクーターに乗りたくもないこの寒さ 金沢市 篠原古戰場  
もう山に雪が来たそな一杯屋 同  
バスボデイ煙草を消したらしい跡 同  
母さんの影には居らぬ娘に育ち 岡山県 光好三四詩  
おしまいは酒ど知つてる検査なり 同  
中毒になるとは知らぬ折をさげ 同  
割箸も捨てぬ女房と山を下り 京都市 田中 南桑  
お願いに上つた椅子が大きく過ぎ 同  
そこいらで誰か呼びをな秋の空 同  
妥協などこんでもないと一本氣 大阪市 横田 方眼  
腹も立ちますが使はれます身の 同  
病み上りまだ爪切るはちとはやし 同  
新世界へ行くジンヤバーに着替へて出 貝塚市 津田 千舟  
タバコ屋の老舗を買うた手切金 同  
中間派頭を下げて来るを待ち 同  
内祝まあ風呂敷を配つとこ 岡山県 岡野風の子  
当選の祝に投票せぬのも来 同  
遅刻したわけはパチンコも言へ 同  
夏物の特價へ近所誘ひ合ひ 大阪市 古城しげ子  
竹光でみんなきられて幕が降り 同  
警棒を持つ手が悪意の手ともなる 大阪市 平野喜久治  
女ある故に家庭が壊滅し 同  
会場へ講師の馳走匂うて来 岡山県 佐々部満佐志  
女房のおじぎも一票獲得し 同  
アベックへ募金すかさず賣りつゝ 岡山県 繁松 義夫  
誕生日毎に難産聞かされる 同  
照れくさい顔が團体旗につゞき 貝塚市 大田へちま  
幸福の一語に女だまされる 同  
サングラス外見をすなど言うかたち 堺市 丹波 大路  
夏中を働き通した帯のしみ 同  
子を捨てて朝鮮迄も恋は往く 大阪市 永田都志子

胸はずむ三十路を越えし恋なれど 同  
冬の滝ツラ、を美観と名づけたり 愛媛県 青野天下堂  
ドン底の暮しへ望まだ捨てず 同  
家柄が良くて悲しい恋となり 岡山県 西山 節子  
秋空の雲突ききつてホームラン 同  
空こんなきれいに死なないぞ 貝塚市 多炭 若柳  
白菊捧げて君が午睡の夢に来る 同  
とぎれたるマイクすこし腹を立て 貝塚市 美野百合子  
孤独とは言うまいラジオの歌流る 同  
案山子だと知つてゾトする夜道 島根県 星野 侑正  
パチンコ屋がネオンをって田舎町 同  
新聞を被て寝た顔で泣いてゐた 貝塚市 小田 柳美  
口説かれて虫をば賞めてばかりる 同  
残業と思つて待てばパチンコ屋 岡山県 長尾 越鳥  
月末の財布チャックもあけたまま 同  
子が無くて悴せだつた未亡人 岡山県 松村 怠坊  
確信のないアンバイヤーで又も揉め 同  
忘れ物だどキッスしに戻り 岡山県 楢原 一善  
娘十八一人で泣いて見たい夜 同  
用心に便所の位置も聞いて居き 岡山県 小林 夢介  
風邪引いて寝たいと思ふ日が続き 同  
標準語で話せば冷たいものにされ 大阪市 伊藤 定美  
母と娘の暮し戦後派にはなれず 同  
川堤パン／＼という彼岸花 高知市 岡本 元馬  
税務署と隠した帳が見当らず 同  
夜遊びも妻同伴のパチンコ屋 岡山県 佐々木告天子  
五分あれば行ける会社を遅刻する 同  
我が影を踏んで短き秋暮れる 大阪市 松元 利行  
二女の理想女子大まで行く云ふ 同  
名月を邪魔する雲も見あたらず 山口県 加川 大然  
ストリップあんなムホン起きぬ顔 同

### 奇名傳

#### 長野文庫

て、同僚に引継ぎ、永らく勤務を共にした  
人々に別れを告げて帰り道。  
肩ふれて君と歩むも今日限り  
丁B菌若い二人を引き離し  
天国と地獄はこんなに近いもの  
夜十時、床に就く、もう何も思ふまい、  
すべては運命さ。  
何事も先づ健康と云う白書  
一九五二年九月

近所に住んで居て、先々代から交際して居  
り、而も平素その人柄に敬服して居る村上  
寛逸氏が、市の教育委員に立候補したの  
で、止むに止まれぬ大和魂の気持で、一  
切の家業を放棄して、十日余り選挙事務長  
として尽力した。結果は残念乍ら惜敗、落  
選の憂き目を見たが、その仕事の性質上、  
市内の有権者名簿を繰返し繰返し見た。そ  
して今治市にも随分変つた姓名の人が居る  
のに驚いた次第である。姓氏で一番多いの  
は越智、村上両姓で、楡垣、長野なども沢  
山あつた。名前の方では順一郎とか武一と  
か一の字が附いて居る人が以外に多数あ  
る。姓氏には地名と同一のもの、例えは神  
戸、福岡、川崎、長崎、長野、金沢、小  
倉、岡山、富山、松山、高松、西宮、清  
水、小松、福島、上田、山口、など全国の  
地名は殆ど姓氏になつて居る。西条とか倉  
敷とか云う姓のあるのも初めて知つた。面  
白いのは今治(イマジ)と云う姓である。  
わが今治(イマバリ)と同一文字である  
が、名前は同一であつた。一そり市長(イ  
チナガ)とでも附けておけばよいのにと大  
笑いした次第だ。

戒名もさら／＼と書く檀家の死 鳥取市 徳持晩稻子  
 將棋盤君逝きてのち忘れられ 岡山県 堀 不漁  
 汗顔の至りと汗も出さず詫び 岡山県 堀 不漁  
 又聞きに勝手な色を添えて置き 同 同 同  
 まゝごごへ父の晩酌までも眞似 津山市 三木 香平  
 欠伸したごたんに恋を取り逃がし 同 同 同  
 壁越に隣りの短氣皆聞へ 津山市 田口今日坊  
 結婚へ知らせたくない 左前 同 同 同  
 難産に隣のラジオ止めてほし 高知市 松下 蘇水  
 難産に皆そう立になつて居る 同 同 同  
 柿の葉の蔭から秋が顔を見せ 下関市 向田妻揚子  
 吾妻と言ふ名も哀れボロを着て 同 同 同  
 選挙運動唯願ひます／＼ 豊川市 堤 ちえ  
 看護婦の腕の太さがうらやまし 同 同 同  
 捨てられし西瓜の種は生きて居た 京都市 佐久間折草  
 じつと見つめて叱られる妻の顔 同 同 同  
 お婆ちやんがいちばん早い冬仕度 貝塚市 永吉 喜好  
 愛情を勘違いしたラブレター 同 同 同  
 月が出し忠霊塔が白く浮き 岡山県 進藤良畔子  
 兄弟が似て来て共に老を知り 同 同 同  
 寝ておれと言つたに妻は寝ておらず 岡山県 大塚美能留  
 歓迎があたり見世物めいて来る 同 同 同  
 急病で近い他人の情知り 大阪府 富永 静臥  
 宝くじ勝手な時の神頼み 同 同 同  
 板垣いこも銀行建つらしい 大和 戸田 嘉一  
 箸買うて帰る青い眼の婦人 同 同 同  
 名物をあけるうつわが大きすぎ 大和 戸田 悦子  
 知事代理やはり代理に迎へられ 同 同 同  
 もう話つきたかアベツク石を投げ 玉野市 迫田美婦適  
 競輪で負けた当座はよく動き 同 同 同  
 甘えてた看護婦すつと辞めてゆき 貝塚市 武安 嘉彦  
 リスにやる餌代両替して貰ひ 同 同 同

漫才師家へ帰つてもコンビ 大阪市 岩垣一点子  
 窓口の義憤ほつとけない氣性 同 同 同  
 叔母の家金を借らねば傘を借り 福岡県 岩田十三楼  
 母の噂娘は言ひ得ずに聖書読む 同 同 同  
 公僕にしてわと思ふ生活しむき 京都市 井上 吉造  
 酒の藏などとコップで飲ます店 同 同 同  
 野辺の恋すつかりきいた虫もおり 大和 中谷 卓兒  
 名にしをふ名所に住んで羨まれ 高田市 同 同  
 会へばすぐ涙ぐむのも里の母 大和 野田 勝豊  
 セロファンの袋店舗は秋の柄 高田市 同 同  
 コスモスを持つて御無汰汰詫びくる 貝塚市 小島さぎす  
 クイズにも聞きあき出し病が疲れ 高槻市 谷脇土佐兒  
 親ゆづり子も鉄道に籍をもち 岡山県 奥田 吞舟  
 二ア人の目にもう蓑虫家があり 愛知県 岩川 寛虚  
 妻は左派夫は右派で民主主義 岡山市 河田 五風  
 予算には妻のオーバも入つてた 京都市 高田 薫  
 新名所一つふえたりダムが出来 岡山県 古谷 馬洗  
 文化都市わて大阪の渡し守 大阪市 眞鍋 一瓢  
 秋風よ僕には避けて吹いて呉れ 大阪市 大塚 一球  
 バス賃が只の子供を連れて出る 布哇 滝 純香  
 政策を聞けば生く事のこうさし 岡山県 沖 一糸  
 おしぼりへ今日は一人でない座敷 京都市 清水とみ子  
 藝道に生きてる父にある白髪 京都市 鈴木加代子  
 蝗とび豆がはしれる秋日和 岡山県 國正田吾作  
 豪壯な家雑草に埋れどり 岡山県 難波 陽炎  
 バスの道きけば時間も教えられ 岡山県 栗正佳目夫  
 赤い羽根快晴だけに心よし 滋賀県 久保 邦友  
 おつちよこちよい又しとつた朝が来る 岡山県 池田 古心  
 内幕は言へず矢張り寄附を出し 豊中市 村上ゆづる  
 秋の七草では酒にもならず 愛媛県 島井 川島  
 黒帯がもう目の前で肺をやみ 津山市 菱川 正美  
 道端で乳房も出せる母となり 岡山県 繁松 玉露

又安芸、周防、讃岐、土佐、伊豆、甲斐、山城、和泉、河内、淡路、丹波、丹後など  
 国名と同一の姓もある。讃岐氏は大仙と云  
 う坊さんで、丹後氏は市警の次席の人だそ  
 うだ。一字姓では周、住、泰、菅、斧、関、  
 牧、桂、林、森、石、島、鳳、東、西、南、北、  
 岡などから飯、イイ、鱸、スキなどあり、  
 何れもレツキとした日本人である。三  
 字姓では木野山、小井出、小水尾、日和  
 佐、田の蜜、塗ケ一、佐々木、梅野尾、葉  
 師寺、長谷部、日比谷、日比野などで、  
 中でも塗ケ一と云う姓は恐らく全国でも珍  
 らしいと思う。珍名は余り見当らぬが芳  
 坊、野津太郎、鍋好、鬼代松、夢鳳、湘  
 洲、一伯、大五、一八、九十九郎などは変  
 つて居る方だらう。夢鳳氏は姓を桑江と云  
 い、元南高校の校長さんである。女では紀  
 子(ノリコ)小芳、とめ、とら、かみ、養  
 子、百子などが一寸変つて居る。姓名を一  
 語に讀んで可笑しいのは大河清、黒川澄  
 子、越智マスヨ、安井品造、青葉薫、林  
 茂、十籠ツル、田中樹、小山大、中野一人、  
 高井登などで、越智タマエ、越智マスヨなど  
 選挙には縁起の悪い名であらう。初めに今  
 治市には一の字の附く人が多しと書いた  
 が、今治市議会議長は不思議にも一の字が  
 つく。初代の田阪庄三郎氏を除いて武内信  
 一、国貞盛一、斧梅一、長井信一、松原清  
 一から現議長矢野米一まで妙に一ばかりで  
 ある。又市議にも一の字が多く矢野米一、  
 武内信一、斧梅一、高橋伊勢一、田窪権  
 一、菅菊一、吉武貞一、一色猶助など三十  
 名中八名も一に縁がある。一番簡単なのは  
 小川一で、一番長いのは秋川利右衛門(元  
 署長)などではあるまいか。

× × ×



# 川柳 今月の歴史

(十二月の巻)

主要事件、行事、動勢、人事等  
昭和二年十二月日関口文象は川柳  
文金集を著し明治三十七年当時の  
川柳研究会小史を綴る。昭和七  
年十二月東京三越において剣花坊  
贊、無底画伯の川柳贊画展覧会開  
催。同十年十二月二十六日東京新  
宿にて吉川英治、平林たい子らに  
よつて井上信子を勸まらず会開催。  
同十五年十二月十九日比谷松本  
楼において日本川柳協会(東京二  
十四吟社を組織)発会式を挙ぐ。  
(追補)昭和六年十月二十五日日  
本大学講堂で川柳講座を開く。角  
恋坊、雀郎、鈴十坊、久良俊、劍  
花坊講演。同十年十月二十八日東  
京新宿で大村新蟬話会開催(周  
魚、杜若、○丸、文象、金比古、  
角恋坊ら世話人)

主要圖書の出版  
明治十二年十二月(以上何れも  
十二月につきこれを省略)「明治  
新選柳多留」が松阪屋金之助板か  
ら。同三十六年石原ばんがく著  
「家庭たのしみ川柳の巻」が通俗世  
界文学社から。同三十七年阪井久  
良岐著「滑稽文学川柳久良岐点」  
が金邑社から。同三十八年田能村  
梅土著「新川柳抄」が読新新聞社  
から。大正四年川上三太郎外五名

話会から。同年川柳研究社編「皇  
紀二千六百年奉祝紀念句集」が同  
社から。同十六年石曾根民郎著  
「句集大空」が不朽洞から。同年  
島紅石遺著「水と闘ふ」が横浜川  
柳人クラブから。同年母袋末知庵  
著「川柳補公記」が書物展望社か  
ら。同十七年岸本水府著「足に關  
する川柳」が福助足袋株式会社か  
ら何れも出版。

編「大正新川柳大全」が至誠堂か  
ら。同五年井上幸一編「沾知寸之  
音(青藤正次遺稿)」が同氏から。  
同十三年宮武外骨著「古川柳研究  
変態智識」が半狂堂から。同十四  
年田中五呂八編「新興川柳詩集」  
が川柳水原社から。昭和三年大塚  
三拍子編「川柳波瀾句集」が川柳  
浜の会から。同年松川弘太郎著  
「麗語考」が江戸文芸同好会か  
ら。同年「川柳梅むらの夕」が同  
社から。同四年句集「雑音に生  
く」が大坂の川柳使命会から。同  
七年井上劍花坊編「新川柳自選句  
百三十三人集」が柳柳寺川柳会か  
ら。同年磯部鎮雄編「やない宮二  
編」古川柳翻刻第二編「菫姑柳」  
同三編「俳諧独あるき」が何れも  
柳書行行会から。同八年塩井梅仙  
著「柳梅拾遺詳解故事之部」が建  
設社から。同九年新海素泉編「河  
合紫石集」が同氏から。同十年谷  
孫六著「世渡り川柳なるほど草  
紙」が森田書房から。同十三年駒  
井競編「みの作品集」が同氏から。  
同年渡辺虹衣著「川柳十二月」が  
東京テンセン社から。同十五年岸  
本水府著「川柳文学雜稿」が番傘  
川柳社から。同年相元文之助編  
「櫻原神宮奉納川柳集」が川柳懇

主要柳詩の興歴  
大正七年大阪から出ていた「土  
阿子」休刊。同年岡山から出てい  
た「街燈」休刊。同九年山口から  
「朱羅宇」創刊。同十一年朝鮮か  
ら「雞林川柳」創刊三号で終つ  
た。同十二年広島から「千里十  
里」創刊。同十四年「山樽柿吟  
社」創刊。同年東京から「みや  
こ」復刊。同年「さいころ」創  
刊。同十五年金沢から出ていた  
「百万石」休刊。昭和三年函館か  
ら「ひくま」創刊(函館の各吟社  
合同)。同年大阪から「柳の窓」  
創刊。同八年東京から「みその吟  
社」創立(茶六中心)。同十年東  
京から「青空」創刊(信子中心)。  
同十三年金沢から「北陸川柳会」  
創立。同十四年大坂昭和川柳社か  
ら「竜」創刊。

市村俗伝(東京)は昭和二年十  
二月六日四十九才で逝く、桃中軒  
雲右エ門の台木作者。杉村蚊象

(京都)は同五年十二月二十四日  
四十才で永眠、番傘創立当時活躍  
した。木村晃草(別府)は同七年  
十二月十八日三十三才で病に倒れ  
た、川柳支那幹事異色ある作家だ  
つた。伊藤愚陀(大坂)は同月二  
十七日二十四才で病歿、川柳編輯  
局同人として将来を囑望されてい  
た。河合紫石(松山)は同八年十  
二月八日五十三才で永眠、川柳支  
部幹事で人望を集めていた。蓮沼  
九光(白河、東北川柳同人)は同  
九年十二月二十六日四十才で他  
界。尾上夜半杖(函館、名句川柳  
会主宰)は同月二十八日五十代で  
逝く。市川巴流(京都、俳優新升)  
は同十年十二月二十二日五十一才  
で永眠。伊藤美沙子(松江、川柳  
風呂社同人)は同十一年十二月二

日二十代で逝く。中島柳坊 神  
戸)は同月三日三十三才で逝く、  
ふありすと同人、元「羽衣」発行  
人。夏目翠石(神戸ふありすと同  
人)は同月十七日七十三才で永  
眠。奥田雪緒(松江)は同十二年  
十二月五日大山にて猛吹雪のため  
遭難。駒井美の作(豊中)は同月  
八日四十八才で他界、元川柳同  
人。湯本白庵(大連、句帖舎同  
人)は同十六年十二月十九日六十  
代で永眠。加藤勝久(京都番傘同  
人)は同十九年十二月三十一日、  
リニエ島で戦死。  
(追補)鶴形(東京)は昭和十  
三年九月十四日二十九才で逝く。  
反戦句により受刑、「川柳人」で  
活躍した。  
福田山雨楼編

麻生路郎著 水武書房版

川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新  
指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなもの  
かから」説き起して収むところ三十七講、平明で、親切で初心  
者は本書を繰くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得する  
ことが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書で  
ある。敢えて一説を薦む。

B 六版 (二二二頁) 定價一〇〇円 送費 十六円

取次御注文は 大阪市住吉区南内方四丁目三十五  
番 川柳雜誌社 電話 〇五〇五〇

川柳雜誌社

好評 〆

取次御注文は 大阪市住吉区南内方四丁目三十五  
番 川柳雜誌社 電話 〇五〇五〇



物故川柳人柳生路主幹

木魚の音もしめやかに

# 物故川柳人慰靈句會

於光明寺

本社主催の物故川柳人慰靈句會が十一月一日午後五時半から下寺町の光明寺で修営された。会場大広間の正面には柳祖柄井八右衛門翁の像（故吉田きよし描く）の一軸が懸り、靈前には香華の薫と共に川柳雜誌社及不朽洞會理事長からの供物があり、既に慰靈句會の雰囲気は漂わし部屋の片隅には下記十氏の故人の句に絵を配した川柳行燈がズラリとかかげられ、いかにも慰靈句會らしい光りを放っている。十氏の句は

井上劍花坊（輝くやもとより金に嫁せし身の） 坂井久良伎（昔ぬいてしまへと齒医者惜気なし） 小島六厘坊（店賃に詩を書いてやる李太白） 長崎柳秀（借りる氣へ膝をくずせのまあ飲めの） 笠原路生（デカンショになつて舞妓をかへり見ず） 西田卿葉（長襦袢女は風邪をひかぬもの） 高橋かほる（待合せ帽子の型を折り直し） 岩崎柳路（誘ひ人は茶漬かき込む音を聞き） 米本貴志子（継ぎはぎの服かと聞けばはやりとか） 関本雅幽（南無阿彌陀仏と炬燵へぐつと伸び） 句の揮毫は路郎先生、絵は古方。又正面床脇から、他の片側の壁間には故人の遺作の品々が展出され、参會柳人の眼を釘づけにする盛観。それ等の中には久良伎翁が往年路郎先生に贈られた書簡の掛額（路郎愛蔵）掛軸には劍花坊の「緋撫子お七を焼いた原に咲き」（路郎所蔵）、「ふ良伎の「後送は何しきと首を久り」（春菜所蔵）、柳秀の「きんぎよやに雛妓袂を教へられ」（路郎所蔵）、柳秀の「栖鳳へ斟しやくのない鯛

のふん」（葉所蔵）等が異彩を放ち、虹衣、路生、禮舎、水虹等の短冊、珍品としては柳秀、路生、禮舎、芳一揮毫の葉焼の皿（葉愛蔵）、辰巳離楓の遺著、後藤青児の句集草稿、山雨楼揮毫の戦中戦後の物故川柳人似顔絵が親しみ深く眺められた。その外、路郎先生が所蔵される物故川柳人の写真、山雨楼氏宛の故人の書信等が展覧されてある。

斯くして開會時間間近には七十余名の参會者が句箋を手にして、故人との靈の交流を感じながら作句の三昧境に入った。やがて席題の締切があり、潮花氏の司會により、開會が告げられ、不朽洞會理事長中島生々庵博士の挨拶があつた。本日の諸靈の中には阪大時代の恩師であり川柳に於ける先輩である長崎柳秀、笠原路生の両博士もいられることと中島理事長にとつては特に感慨深きものがあつたらしい。

次いで光明寺住職加藤秀嶺師の法会説経があつた。法鈴が鳴り、低声ではあるが老僧の力強い法偈ながれる。中心は「仏説觀無量壽經」の仏身説文三九四字である。有名な王舎城の悲劇の女主人公草提希夫人に対する釈尊御説法の核心である。木魚の音も、しめやかに、一同シーンとなる。

続いて左記物故川柳人の姓と雅号が西尾葉氏によつて読みあげられた、その間に焼香が路郎先生からはじまる。二基の香炉から立ちのぼる香煙が秋の夜長を静かに流れる。

柄井川柳・井上劍花坊・坂井久良伎・小林紅法師・左和右平・藤村青明・太藤治郎・西垣松雨・前田青岸・今井卯木・河村桃哉・久住其象・塩田大棗子・武笠山椒・矢田冷刀・西原柳雨・辰巳離楓・河盛芦村・熊谷紅・村上源氏・柳川洲馬・武智彌生・茨木奈緒美・朝田スエノ・木村晃草・伊藤愚陀・近藤飴シ坊・清水虚白・池田梨花・中川シナ子・田中五呂八・畑田炭車・酒井大棗・大窪文芳・福田鶴峯・森本秋子・長谷川三汀・坂口芳一・奥野其典・小林禮舎・関本雅幽・酒井斗風・佐々木干隈・田中風葉・長崎柳秀・加川泉池・森東魚・清水友航・熊本春景・清水史路・津路紅多呂・原史風・沢井乃夫路・高橋かほる・佐々木鳥巢・巽無一・西田卿葉・松盛寿枝女・中沢濁水・山中大仏園・西村

山月・後藤青児・岩崎鶴路・楊平山・星野秀女・片岡麗夢・早川聡松・松尾琴人・斎藤松樹・片山青娥・村田流木・村上角堂・笠原路生・浅田春開・安井ひろし・安井欣女庄ため・小島六厘坊・岩崎水虹・宮岡白峯・酒井雲骨・楡山千代二・多田市多様・太田徹底郎・宮内一洲・竹内多開・井上刀三・喜田飯山・金毛志郎・羽風林・森井荷十・西木三笑・安西吾三・今枝四郎・桑原京郎・和田源切・松村敏郎・三輪五輪・白井柳里・若井たけし・西村明珠・古川風竹・源田羅門・平井蒼太・龜井忠雄・石森静太・敢田善門・青木寄城・山川陽人・田淵あをやぎ・岡田三面子・矢野錦浜・都藤冷笑・平瀬真雄・駒井美の作・奥田博緒・千原福司・穂積重遠・米田孤舟・本田水鏡・山本十四郎・篠山亨作・高木角葱坊・杉原大研子・高木東魚・木崎大老・上田宇都羅・大橋かい知・岸本悟志・水木真弓・米本貴志子・の外に川柳人以外では末広殿太郎・小酒井不木・小出橋重・森ほのは・長野吉高・加藤静別・谷脇素文・頼原退蔵・岡本一平・高島米峰・高田十郎・吉岡島平・片岡直方・吉田きよし

過去帖の創設が終ると

衆生無邊誓願度

煩惱無数誓願斷

法文無量誓願學

仏道無上誓願成  
と四弘誓願を以て敬蘭に法会を閉じられると、路郎先生の柳話「物故川柳人を語る」に移った。この夜の先生は柳話と云うよりも過去帖片手に、その一人一人に話しかけていられるようであつた。今はじき先生の柳友や教え子たちの追話を語り、死に方にまで触れられしみるゝとなつてしまつていられた。一夜を明してもまだ時間が足りないさまで、遺品の傍に歩を移しては一つ一つ紹介された。先生の柳話が終わった時には八時半をとづくにまわつていた。今日は兼題が五句づつなので各選者の前にては没句がうずたかく積みかさねられていた。しかし名句の多かつた

のは諸英霊との魂の交流のお蔭かも知れない。「ようおまいり」と選者の誰かが挨拶されていたが

それも慰霊句会らしい風景としてうけとれた。九時すぎとどこほりなく会を終る。



山雨樓画

戦中戦後の物故川柳人七十二氏の顔似

## 感謝

物故川柳人慰霊句会も各位の御協力によつて滞りなくすまふことが出来た。まことに有難いと思う。当初この企画を発表したところが大方の賛同を得たばかりでなく、東都の阿部佐保蘭氏、横濱の福田山雨楼氏、愛媛県の渡辺謙童氏、京都の八木迷々氏その他から、故人の遺族の住所などまでも懇切にお知らせ下さつたので、何とかして、御遺族の方々とも連絡をとり、故人の遺作や遺話なども宛め、御遺族の方々にも御参列を願ひ慰霊の契を挙げたいとひそかに方法を講じようとしたのであるが、さてそれが実現を期するには多くの時日を要すると、多額の費用を提出しなければならぬ。一方社務が日に月に忙しくなつて行く現状にあつて、万一中途で不実行に終るようなことがあつては故人の霊に対してまことに申訳がない、再考をした結果、物故川柳人の範圍もある程度にとどめ、御遺族の方々も特にお招きしないこととし、故人との魂の交流が出来さえすれば、それに越したよるこびはないと句会本位のものに改め、不朽詞会々員に実行委員になつていただく、別掲のような献納な、しかも慰霊句会にふさわしい集りをしたのである。従つて、物故川柳人の選定も、主として川柳雑誌社に縁故の深か

つた方々、柳界の先覚者、柳界の功労者ならびに、川柳人ではないが川柳雑誌社発展のために種々援助をたまわつた人々の諸霊をも含めて慰霊句会を取り行つた訳である。なお川柳雑誌社とも、又路郎主幹とも特別な縁故があつても他社に於て慰霊されているであろう又慰霊すべきであると思える方々はこれを省いたと云うまでも別に他意はないのである。又それほど川柳雑誌と格別の関係はないが曾ては柳界に活躍されていた川柳人で物故と共に所属柳社が後を絶ち、今日柳界の無縁仏ではなにかと思われの方々に対しては慰霊の礼を以てすることにした。

次に不朽詞会員で当催しの実行委員として下記の方々の労を多とするものである。古方 委員長 栗、鮎美、豆秋、没食子、香林、文蝶、白柳子、水客、紫香、淡舟、春巢、潮花、万滴、いわを、春柳、愛論、夢裡、貴山、恒明の諸氏。数度の会合の後、最後の委員会を十月廿九日夜生々庵居で開催、生々庵、古方、紫香、万滴、文蝶、夢裡、栗、いわを、潮花の諸氏と梨里、路郎とで、準備や配置等燈遺漏のないよう打合せを行つた。川柳行燈の点燈については万滴氏と生々庵の義弟百生氏を煩わした。こゝに謹んで御礼申上げる。

昭和廿七年十一月

川柳雑誌社

主幹 麻生路郎

なお当夜の不朽詞会のカップの把持者は里田一十氏であつたことを附記する。(戸田古方記)



# 薩摩守忠度

## 富士野鞍馬

薩摩守といえは「只乗」の酒落に今でも使われて親しみがある。忠度は清盛と二十六ちがいの末弟で、正四位下左兵衛佐薩摩守であつた。そして和歌に堪能であつたことは有名である。

集」を完成し、その中に忠度の作から、さざ波や志賀の都は荒にしを昔ながらの山桜かないかにせむ御垣が原に瀧む岸のねのみなけどもしる人ぞなきの二首を「説人知らず」として選に入れたのであつた。

壽永二年(一一八三)秋、木曾義仲に追われて、平家一門と共に西へ逃げる途中狐川から引返し、京都五條の藤原俊成卿の門を叩き、「世静まり候ひなば勅撰の御沙汰も候はんすらん。是に候ふ巻物の中にさりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩を蒙りて、草の蔭にて嬉しと存じ候はば、遠き守りでこそ候はんすれ」と年來の詠歌の中から自選百首余り書き集めた巻物を俊成卿に托して西へ落ちて行つた。

後文治三年(一一八七)九月に俊成は勅選集二千載和歌千載へ忠度たかるしろしんさ

(同 四四)  
忠度は龍で七ツ半をき、

(同 七二)

忠度はその夜小桜おどしなり

(同 五八)

腕のあるうちに桜の歌を書き

(同 二四)

須磨の戦で腕を切られる

(同 三五)

狐川より引返し行かれる

(同 三五)

行かれての歌は須磨で詠むので、この作者は感ぢがい

説人しれず千載を貸なくし

(タル 九八)

現ぶた志賀の都と下女ぬかし

(同 九九)

安い難志賀をかくした山桜

同八四

この「さざ波や」の歌は忠度二十三才の作で、昔の隆長の作、

さざ波や志賀の都は荒にしを

まだすむものは秋の夜の月

の下を置きかえたものといわ

れているが、忠度の歌の方が

はるかに優れている。

平氏一門は、その後四國、九州を廻つて再び神戸福原に

抱つたので、壽永三年(一一八四)二月範頼義経に攻めら

れ、一の谷の戦となり、その

時忠度は此所を最後として、

行きかけて木の下陰を

宿とせば

花や今宵の主ならまし

の一首を作り、短冊に認めて

簾につけて戦つた。これが辞

世になつた。

いそがしく職なかばに行くれ

て (拾四)  
行かれた歌を鑑のひきあはせ (タル一六一)  
「鑑の引合せより疊紙取出て」の文句取り  
忠度が紋の胡蝶も花の蔭 (タル一六七)  
忠度は木曾も出さず宿をかり (同 四八)  
行かれずとも宿とする廊の花 (同 五七)  
この三句は歌酒落  
そして忠度は、岡部六彌太と出会い、取つて押えたところを六彌太の郎党に右腕を切られたので、左の手で六彌太を遠くへ投げ飛ばしたが、遂に六彌太に討たれ、四十一才が最後であつた。  
忠度はいっぱしめした気で押へ (タル三)  
忠度は勝手をわるく取つて投げ (同 六)  
片腕になる郎党を岡部もち (拾五)  
俊成卿の片腕を打おとし (タル十九)

一品料理と生そば  
グリル 芝 鶴  
上六キヤビトル映  
画館 東三軒目



六彌太は符牒のついた首をと

り (拾六)

忠度はこのように戦死した

が、他の一門は壇の浦で自刃

入水したので、

忠度の外は浪路に行暮れる

(タル五八)

と忠度の辞世の歌にかけて詠

んでいる。又淨るりでは裡菊

という俊成卿の養女で岡部の

妹が忠度の妻になつているの

で、

忠度は色も香もある亭主振

(タル九四)

俊成に岡部それから憎まれる

等の句も見える。

(同 十三)

# 柳界展望

▼本社主催物故川柳人慰霊句会が十一月一日午後五時半から光明寺に於て開催され、別稿の如く盛會、不朽洞賞カップは里田一十氏が獲得された▼大阪交通局文化祭川柳会が十一月三日午後一時から大交會館で開催された▼休温川柳会(貝塚市)五〇回目の句会が十一月九日午後一時から千石荘集會室で開催▼川柳支部復活句会が堺川柳人グループ協賛の下に十一月十二日午後五時から堺労働會館で開催▼大阪通信病院川柳会は十一月十五日午後二時から三階図書室で開催▼大阪市民文化祭大阪市民川柳大会は大阪市教育委員会主催の下に十一月十六日午前十時から毎日新聞社三階大講堂で開催▼大阪市南区医師會文化部川柳会は十一月十八日午後七時半から太希志居で開催▼南海電鉄川柳会は十一月二十四日午後六時から粉浜の親和寮で開催▼川柳阿倍野支部川柳会は十一月廿七日午後六時から近畿直営地下食堂で開催される▼二葉莊小集(岡山県)は大原瀧柳会の人々を迎えて開催以上何れも路郎主幹出席▼川柳北大阪支部は川柳梅田支部、川柳淀川支部、川柳桜島支部、川柳池田支部に発展的解消句会を十二月二十日正法寺で盛大に開催した▼川柳岡山支部句会は十月十二日山陽旅館で開

催▼川柳岡山市内グループ創立句会が十月十七日満年居で開催▼新居浜市政十五周年記念川柳大会は十一月九日に開催▼神岡紅葉日比製煉所句会(玉野市)は九月三十日興比会館で開催▼三井造船所句会(玉野市)は十月二十五日三友俱樂部で開催▼山口県下川柳大会が十月下旬山口湯田温泉の因鉄職員會館で開催され下関川柳支部が

市官廳界代表、各文芸団体代表等と交じり盛會だつたと▼青桂川柳会(伊丹市)は十一月五日夜健保會館階上で開催▼せんば川柳社句会(大阪市)は十一月五日午後八時から臨田無名居で開催▼川上三太郎氏(東京都)は十月二十二日NHKから放送▼福岡葉留路氏(広島市)は県市教育委員会主催の川柳句会で兼題「赤い羽根」の



(関下) 列行装飯会動運大念記年十八鉄國

(日四十月十)士運結良田飯日人二らからてつ列

市)では柳燈を圖案化したバッジを作つた▼瑣吟社(熊本市)は一月六日午後六時から梅里居で開催される▼故大曲駒村氏(川柳辭業の著者)の遺著顕彰會が埼玉県に設けられ「遺著顕彰會」全十冊が會員制度で頒布される▼日置文笑氏は鳥取県東伯郡倉吉町、厚生病院第二保養八号室に入院された▼田中柳葉氏が十月十八日横浜市長者町の自宅で死去された同氏は高橋昭醇氏の義兄で獅子頭時代から東京若柳會の同人であつた譚んで悼む。

## ★ 川柳支部の改組と新設(二)

### B 地区支部

川柳出張支部(尼祿之助)川柳東京支部(宮田不二)川柳鳥取支部(中島鉄洲)川柳姫路支部(夷一笑)川柳小郡支部(長野井蛙)川柳下関支部(国弘半休門)川柳八代支部(佐野卜占)川柳大聖寺支部(野村味平)川柳名古屋支部(吉田水車)川柳大牟田支部(高田均逸)川柳貴生川支部(黄瀬美秋)川柳備前支部(浜田久米雄)川柳岡山支部(藤本滿年)川柳弓削支部(福島鉄児)川柳岡田支部(大森風来子)川柳岡山県庁支部(服部十九平)川柳吳支部(林野随光)川柳詫間支部(大西送窓)

### C 地区支部

川柳布哇支部(古川慶花麗)  
不朽洞会役員の新陣容

★十月四日夜不朽洞会理事会を中

島小児科診療院階上で開催、理事選挙制が実情にそわぬため路郎師と理事長の合議推薦者を常任理事会で審議決定することとし左の通り新理事を決定した。常任理事は路郎師と理事長の合議推薦、新相談役の増員があつた。▼理事長(生々庵) 副理事長(武部香林・村松夢裡) 常任理事十名(古方、豆秋、鮎美、栗、没食子、文蝶、白柳子、琴光、春集、小松園)

▼A地区の理事十七名(貴山、紫香、瓜平、零論、竹荘、淡舟、水客、万滴、梅里、摩天郎、捨舟、潮花、嗣骨、いわせ、青丹子、博也、一笑、無鬼)▼B地区理事十三名(孤鴻、水車、八歩、緑之助、久米雄、半休門、均逸、卜占、光郎、井野、風来子、白星、美笑)▼C地区理事二名(慶花麗、快夢超)▼相談役五名(普天、緑雨、丹路、里十九、山雨楼)なお常任理事会は毎月第四土曜日の夜、中島小児科診療院階上で開催することとなつたので案件があれば理事長手許まで届けられたい。以上。

喪中に付き年末年始の御挨拶を遠慮させて頂きます

昭和二十七年十二月

中島生々庵

大阪市南区観谷 仲之町二〇番地



きつちりと半紙を包むのも本家  
 本家から菓子を買ふ儲けよう  
 疎開したまふ本家も起ちて  
 三代目くづれぬ本家の鬼瓦  
 子を連れて二男本家を見せに  
 本家本家のれんが風にゆれて  
 本家ともなれば焼酎飲んどれず  
 冠婚葬祭本家仲々金が要り  
 本家から来て香典の少な過ぎ  
 菊の庭ほめて本家でよばれて来  
 創業は一年早い本家なり  
 御本家は月下美人買つて出る  
 お流れを受けて本家の庭をほめ  
 おちぶれて本家に金の茶釜あり  
 伝説の井戸そのまゝにある本家  
 ひつそくをした御本家へ五つ紋  
 本家より分家の派手な出納簿  
 総本家元祖本家と隣り合ひ  
 御本家へ別家別家の大しきひ  
 農地法本家の威信地に墮ちる  
 山奥で畠耕才総本家  
 老松が本家の庭をせまくのひ  
 さりながら本家の祖父の平仄よ  
 本心を本家に言ふてひがむなり  
 うまいのも本家高いのも本家

雑音も時々入れる妥協振り  
 千金の夢雑音を妨げず  
 種刈りへ大阪の音ざわ／＼と  
 雑音の出所女将がそつと告げ  
 雑音になれて都会の子も育ち  
 青空へ雑音果しなく消ゆる  
 雑音を二つにきつた救急車  
 人生五十年ただ雑音の様に生き  
 雑音の中を静かなブラカード  
 雑音に拍手の意味が聞き取れず  
 雑音の中で風船破れる音  
 雑音に追つかけてられて子を育て  
 雑音を縫うてネオンのドアを開け  
 雑音が案外いたいところに触れ  
 雑音をのがれ切れない湯に浸り  
 雑音をもう聞き流す吐も出来  
 雑音は六球買へと言ふ如し  
 雑音にめげず聞きたいものは聞き  
 雑音の一人となつて今朝を起き

稲の穂に電線のかげ厄日無事  
 電線へ切るには惜しい枝が伸び  
 寄附依頼ぶあつてきつて封書が来  
 ホイフレンド母つかりさしてお書  
 心配があるのか父の生返事  
 川番へそろ／＼自信が鈍つて来

大臣の暴力沙汰に議場湧く  
 誠税が武器大臣が西下する  
 閣議では云えないことも車中談  
 肩書きが変り役得又変り  
 肩書に守衛うなづくだけのこと  
 もの云うてくれと娘へ父も折れ  
 善人の嘘にうっかりひつかり  
 女房にまた善人は叱られる  
 善人の念には念を入れる癖  
 善人は意見を吐かずじまいなり

東京そばと  
 灘一とすじ  
 アベノ橋地下映画食道街  
 梅里の店  
**大萬**  
 ★大万川柳(第廿一回)を募る  
 兼題「気短か」路郎先生選  
 締切・十二月十五日(自前日午後  
 発表)十二月廿一日(自前日午後)  
 御投句は大万宛・どなたでも

無名林 比呂史 拾舟 一哲 生々庵 路郎 生々庵 太希志 とし代 迷路 兎庵 鳥耕 無名林 生々庵 友淵 貴山報 春柳 翁朱 鳩づる 同 貴山 香林 淡舟 紫香 路郎





### 編輯局にて

▼逐号好評  
なので、張  
合のある編  
輯を続けて  
いる。八月  
以降、毎木  
曜日の夜に  
は梨里、春  
果、没食子、  
潮花の四人  
と小生とで  
編輯部会を  
開らき、新  
企画もやれ  
るので、来年度の飛躍を期待さ  
れるので、編輯局もやつて  
ば編輯業務の検討や講習もやつて  
たい。▼物故川柳人慰靈句会も  
多数の出席があり、慰靈句会もし  
い静粛さと和やかさのよい集りだ  
であった。この次にはもつと範圍を  
拡げて出来るだけ多くの靈を慰め  
たいと思つている。▼十一月の初旬  
に私が不意に旅に出たのと句会が  
いつもより多かつたので、何かと  
多忙をきわめた。その上に十二月  
には私達の岡山行きがあり、A地  
区の各支部の連合大会があるの  
で、新年号を出すためにはガン張  
る上にもガン張りねばならない。  
寄稿家諸氏、不朽洞会員諸氏、愛  
読者諸氏におかれても一層の御協  
力をお願いする。本社句会は師走  
気分が出るように第二土曜日(十  
三日)夜に変更したので、よろし  
く。会場はいつもの光明寺。(別  
稿広告参照)▼新年号は増ページ  
によつて、一段と編輯に新鮮味を  
出したと思つているが、そのた  
めの値上げはしない。(略)

### 不朽洞

▼錠子二氏  
(愛媛県)は皇  
太子殿下の立  
太子の礼なら  
びに成年式を挙げさせられた日  
に「もう手あく立太子礼の天空へ」  
の句を寄せられた▼戸倉普天氏  
(兵庫県)は小学校講堂の新築相談  
役、公民館運営審議会頭、村教育  
委員会委員等々々とききく〜に肩  
書がつくので公私共に多忙に消光  
せられてゐる▼路郎先生は山陽新  
聞社社会事業団主催の歳末厚生  
義金造成書画工芸展に色紙二点  
を揮毫して贈られた▼延永忠  
美氏(岡山市)は十一月一日に柳  
友格一、五風氏等と長島の国立  
療養所愛生園(川柳慰問)に行か  
れる由▼路郎先生は十二月七日  
の山陽新聞記者川柳大会に出席の  
ため阪乃女史同伴六日に大阪発岡  
山に向られる▼八木摩天氏(堺  
市)は徳子夫人同伴で十月四日琵琶  
湖の竹生島に参詣、「詩の島夢  
の国なる竹生島」の句信を寄せら  
れた▼福田丁路氏(高槻市)は十  
一月二日三日の連休を利用して津  
山郊外湯郷温泉に遊び「温泉の  
薫り日頃の疲れ吹き飛ばし」の句信  
を寄せられた▼種瓜平氏(大阪府)  
は郡里富山市に帰省されたそうで  
あるが「二十年を経ると知人もな  
く、道もわからず、風邪を引きそ  
うです」と十一月四日付のハガキ  
▼木村水堂氏(大阪市)は立太子  
式日の十一月十日に二男三君を  
儲けられ母子共に健在とのこと、  
お欣び申上げる「正直に産んでわ

が家の狭いこと」と云う句信があ  
つた▼黒川紫香氏(池田市)は十  
月二日から一週間、社用で広島、  
鳥取、岡山方面へ出張、帰途岡山  
で久米雄、清年両氏に面会談話を  
交わされた▼野本春水氏(吹田市)  
は七月以来養病に親しまれて  
一日も早く全快を祈る▼大西迷窓  
氏(香川県)は支部句報として  
「川雑誌聞」を刊行、支部の発展  
に尽されてゐる▼山本葉光氏の母  
堂タツさんが十一月三日に七十九  
歳で他界された謹んでお悼み申上  
げる。二日の告別式には路郎主幹  
や春柳、豆秋、梅里、小松園氏等  
の顔が見えた▼石曾根民郎氏(松  
本市)は婦人朝日十二月号、入門  
書案内の川柳の部を執筆された▼  
佐野ト占氏(八代市)は日本旅行  
会として八代高校三年生の修学旅  
行を引率、十月廿七日十二時過ぎ  
に阪神電車入口で路郎主幹  
に迎えられ、大阪城から上  
六へ、午後三時伊勢路へ向  
われた▼八木摩天氏(堺市)  
は左海芸芸会に招かれ十一  
月十五日午後五時半から府  
立堺セツルメントで「川柳  
と辨」を講演された▼路郎  
先生は十一月早朝知人渡辺  
二葉氏と同伴、同氏の郷里  
岡山県英田郡大吉村に遊び  
、翌日午後大原彌福会の  
本田恵二郎氏等十数名の来  
訪をうけ句会をされ九日帰  
阪された▼阪田良坊博士は  
近頃元気になられ十月下旬  
国鉄八十年秋期大運動会に  
は氏神の宮司に扮装大囃業

だつたとのこと。(柳界展覧會写  
真掲載)  
新会員紹介  
十二月  
本田恵二郎(岡山県) 正  
清年氏推薦  
真鍋 一瓢(大阪市) 正  
飛雲 春風(大阪市) 正  
潮花氏推薦  
松川 杜的(京都市) 正  
水客氏推薦  
前号正誤  
▼七頁一段三十行目の阪妻を誤ふ  
は老婆を誤ふの誤り▼二五頁二段  
一九行目の社交家の蓄めては社交  
家蓄めての誤り▼一八頁一路集二  
段五行目年末を流しては年休を流  
しての誤りにつき訂正

品質優良  
**先カワペン**  
TACHIKAWA PEN  
大坂市東区豊後町四八  
立川商事株式会社

タチカワペン  
タチカワゼム  
タチカワ  
タチカワ

Printed in Japan

(敬請注意)  
**川柳雑誌** 第七卷  
定価 四〇円  
送料(四円)  
半ヶ年概算 二六四円  
一ヶ年概算 五二八円  
昭和廿七年十一月廿五日印刷  
昭和廿七年十二月一日発行  
大阪府住吉区南瓦町四丁目二五番地  
行司 麻生 幸 二 郎  
発行所 **川柳雑誌社**  
大阪府住吉区南瓦町四丁目二五番地  
電話 六四七五〇

**募集**  
課題吟募集  
期定(十句) 土井文蝶選  
船(十句) 築山快夢起選  
(十二月廿日締切)  
コップ酒(十句) 須崎豆秋選  
一泊(十句) 上田翠光選  
(二月廿日締切)  
近作柳樹雜誌廿句) 麻生路郎選  
川柳塔(雑詠) 麻生路郎選  
文章(評論・研究・感想其他)  
(毎月廿日締切)  
**投稿規定**  
▼投句は各種必ず別紙に認め、住  
所氏名雅号を明記する事。  
▼「近作柳樹」は一般作家の雑吟  
を募る。  
▼「課題吟」は何人でも投句が出  
来る。  
▼「川柳塔」への投句は不朽洞会  
員に限る。  
B列5号 毎月一回一日発行  
川柳雑誌 第七卷  
定価 四〇円

# THE SENRYU ZASSHI

NO. 30

Published monthly by Senryu Zasshi, Osaka, Japan.



生活と文化を  
むすぶ  
マツサカヤ

長生殿  
式場・宴会・祝儀等々

文化クラブ  
藝文の総合文化センター

松坂会館  
民衆文化の集まる所

お好み食堂  
洗練された華やかな装

松坂パーク  
日本一美しいお花見



松坂屋  
大阪日本橋  
電話 311

もっと速く もっと便利に！

とこの期待に堪えて

名古屋ー大阪  
特急 2時間55分

名古屋駅へは 1時間15分  
大阪上本町へは 2時間15分

近畿日本鉄道

たのしいお買物の夢のせた

近鉄の商品券

100円2枚各種  
両面印刷の紙幣



近鉄

お買物をたのしませよう

避妊には...  
ゼリー剤を!



★帯ける時間が長い  
ゼリー剤は、挿入の楽  
で運用しても無害

★注入器で陰部へ  
送るから、タンポン  
に煩わしさをなくす

サンソール

1冊 2大冊 3冊